2016 年度

関西福祉科学大学大学院

社会福祉学研究科

心理臨床学専攻

修士論文題目

幼児期の自立欲求行動における子の気質と親の対応の検討

指導教員（　　鎌田　次郎　　）

社会福祉学研究科 心理臨床学専攻

学生番号　21561001　　氏名　家原 ありな

目次

1, 序論・・・・・・・・・・・・・・・・・・　・・・・・・・・・・・・・・・p. 2
1, 1. 問題提起及び予備調査の状況
1, 2. 目的
1, 3. 予想される社会貢献

2, 方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 6
2, 1. 調査協力者
2, 2. 調査項目
2, 3. 面接手続き
2, 4. 倫理的配慮
2, 5. 検討方法

3, 結果と考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 13
3, 1. 身辺自立欲求行動の欲求表出月齢について
3, 2. 手伝い欲求行動の欲求表出月齢について
3, 3. 日本語版「子どもの行動の調査－3～7 歳時用（BSQ)」
3, 4. 面接内容について
3, 4. ①自立欲求の程度
3, 4. ②-1. 自立欲求行動の具体的な内容
3, 4. ②-2. キッチン用の台設置の実態
3, 4. ③自立欲求行動表出時の感情
3, 4. ④-1. 自立欲求行動表出時の対応方法
3, 4. ④-2. 自立欲求行動表出時の最長での待ち時間
3, 4. ④-3. 自立欲求行動ができなかった時の対応方法
3, 4. ④-4. 子どもには難しいと思われる行動についての対応方法
3, 4. ④-5. 子どもが求める自立欲求行動への妥協案
3, 4. ⑤きょうだい関係との関連
3, 4. ⑥自立欲求行動を容認するかどうかの判断基準

4, 総合考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 46

5, 引用文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 47

1，序論

1，1．問題提起及び予備調査の状況

幼児期に、子どもは衣服の着脱や食事をする際など、親が手伝おうとすると嫌がり自分でしたいという行動がよく見られる時期がある。これを桜井（2006）は、基本的な生活習慣が１人でできるようになる、自分のことが意識されるようになることや、言語能力や思考能力が急速に伸びるなどといった、幼児期の特徴としてあげている。

またデズモンド・モリス（2009）は、著書で「2 歳の誕生日が近づくころ新たな傾向がますます顕著になってくる。子どもは自分で何かすることを主張しはじめる。それ以前は、親に着替えさせてもらい、食べさせてもらい、抱き上げられ、運ばれることを喜ぶだけの赤ちゃんであった。それが今は、親に手伝ってもらうことを拒み、そうした行為を自分一人でしようとするのだ。」と述べており、子どもは生活のほぼ全てを自分でやりたいと要求し、自分で選択することを求めはじめる。そうした行為は、子どもが自立した存在となるためのゆるやかな成長のサインであることが考えられ、高橋（2000）は、「自分でしたい」「〇〇ちゃんがする」といった行動に関して、2-3 歳ごろの第一次反抗期における、ただ「いやいや」というだけでなく「自分で」という自己をさかんに主張している自己の発達であり、だんだんはっきりしてきた自己の概念、あるいは、それに関連して成長している自尊心、自信というものが言わせているのではないかと述べている。

第一次反抗期における自己主張行動の研究に関しては、櫻井（2015）や柏木（1983）の自己制御機能についての研究等で検討されている。第一次反抗期で代表される拒否や否定表現の表出方法の発達に関して櫻井（2015）は、3 ヶ月ごろから授乳児に乳首を唇で振り払うなど不必要な対象を回避するための運動行動がみられ、7 ヶ月ごろには首ふりという原始的な否定の身振り、11 ヶ月には深い感情と結びついた拒否の慣用的身振りが示されるようになると述べられており、発達のかなり早い段階で否定や拒否行動が表出すると示している。また、1 歳 3 ヶ月ごろになると「自分でする」ことが自己目的化して、周りの者が手助けしようとすると激しく反抗してくるようになるとも述べている(櫻井, 2015)。柏木（1983）の自己制御機能の発達における研究では、自己主張・実現の発達は 6 歳にかけて加齢とともに上昇するが、3 歳ごろまでに急激に伸びその後はほぼ横ばいにあること、自己抑制面では 3 歳ごろから 7 歳まで一貫して伸び続けることが示唆されている。2,3 歳児の第一次反抗期における自己主張の強さが、3 歳ごろから上昇していく自己抑制によって制御されていくため、2 歳前後にピークをむかえ、3 歳ごろから落ち着いてくると考えられる。

加えて幼児期の子どもの自立に関して、Erikson（1959）は、幼児期の発達課題を「自発的に物事を成し遂げること」としており、その基礎となるのが「生

活習慣の自立」であり、満 4 歳までに幼児は自分の身の回りのことを自分で行うようになると述べている。櫻井（2015）は、このような「自分でしたい」「ぼく/わたしがする」といった行動の背景として、乳児が他者の立場に立つことがむずかしいという認知的に未熟な状態にあること、自己の意志や欲求がはっきりしており、それを他者に一方的に表現する時期にあること、そして自尊感情が芽生えてくることが要因として考えられ、乳幼児期の自我の発達において非常に重要なものであると述べている。

これまで述べられてきたような幼児期の特徴が、幼児の自己意識を高め、親や保育者への依存から脱却し自立への移行として、「自分でしたい」、「手伝われたくない」などといった自立欲求行動となり表出されるのではないかと考えられる。

さて、近年の子どもは各年齢で達成するであろう課題の発達が遅れていると問題視されている。ベネッセ教育総合研究所（2016）の研究では、10 年前に比べて 5-6 歳児であってもできない課題が徐々に増えていると述べており、2005 年から 2015 年の 10 年間における子どもの生活習慣に関する達成率の低下を示唆している。この研究において、達成率が 5 ポイント以上増加したのは、2 歳児における「ひとりで洋服の着脱ができる」という項目のみであり、排泄の自立に関しては大幅に低下していることを示している（ベネッセ教育総合研究所，2016）。この要因として、ベネッセ教育総合研究所（2015）は親の意識の影響や家庭生活の背景などを述べているが、本研究における調査項目である衣服の着脱や排泄など、自立欲求行動として検討している項目と同様のものが多く、生活習慣における達成率の低下と子どもの自立欲求行動の発達は何らかの関連が考えられるのではないか。

幼児期に自立欲求を育てることは、社会性の発達や自尊心の獲得にも深く関わっていると考えられる。篠原・原崎（2004）は大学生を対象とした研究を行い、幼少期に「自分でできることは自分でする」と親に言われて育った場合、引っ込み思案、責任回避、非自立、追従などといった甘えの傾向が低いと示唆した。このことから、幼児期に自立欲求行動を獲得し、実践する経験が少ないと、自己主張や積極性を伴う行動ができなくなり、現代社会の問題の一つとなっている指示がなければ自分から動くことができない指示待ち人間となってしまうことが考えられる。この自律性欲求とは、自己決定理論における基本的な欲求として挙げられており、行動を自ら生起させたい、行動を決定したいという欲求である（安藤，2003）。また安藤（2003）は、大学生を調査対象として自律性欲求の尺度の作成を行い、自律性欲求の特徴を検討している。調査の結果、自律性欲求の特徴は、自分で決定することを好み、自己決定を求める傾向と、他者の意見よりは自分の考えを重視する傾向の 2 つが考えられると述べている。

しかし、自己決定理論における自律性欲求の定義や安藤（2003）の自律性欲求研究の結果は、自己認知や自己概念が獲得され始めてはいるが、認知的発達

が十分でない幼児期の子どもにはまだあてはまらないものと考えられる。そして、そもそも幼児期の自立欲求について、発達心理学研究のテーマとして取り上げられてこなかったため、自立欲求行動の具体的な行動内容や表出時期などの実態は明らかにされていない。上述したように自立欲求は、社会性の発達や自尊心の発達等、子どもの発達を考えるうえで重要なものであり、自立欲求行動の実態を明らかにする調査が必要であると考える。そのため本研究では今後、発達要因研究として、具体的な自立欲求行動の内容や表出時期、その程度を測定するための尺度を作成、その尺度の開発を通じて自立欲求を操作的に定義した上でその傾向とその後の他の能力や傾向との関係を探究することを最終目標として検討している。

上述したように自立欲求行動は子どもの自立への発達として重要なものとなるだろう。しかし、着替えや食事等を自分でしたがるといっても、実際の子どもはまだ幼く、食事をこぼしてしまったり、ボタンを掛け違えてしまったりと、かえって時間がかかりすぎる等という問題が生じてくるため、保護者からすれば、子どもがするよりも自分がした方がスムーズできると感じることが多いだろう。また、したがる行動内容によっては、子どもが怪我をしてしまう危険性のあるものもあるだろう。そうした様々な要因から、子どもにさせるのではなく、保護者が手を出してしまうことも多いのではないかと考える。

高橋（2000）は、自分でしたいといった行動において、子どものやりたい気持ちの自己主張と、お母さんの世話をやこうという気持ちがぶつかりあい、こうした親と子の衝突が第一次反抗期と呼ばれているのだと述べている。

高橋（2000）は、第一次反抗期における「いや」「自分でしたい」という行動は、おそらく子どもの側の自己主張の仕方がつたないせいだと考えるのがよいとも述べており、子どもはうまく気持ちを表現できるほど言葉や説明の仕方が育っていないために、「いや」や、せいぜい「自分で…」というしかないのだろうと述べている。家原（2015）の予備調査においても、自立欲求表出時に保護者が感じたこととして、「成長している」「うれしい」といったポジティブな内容の意見も得られたが、「親がやった方が早い」「注意を払わなければいけないことが多い」などといった、自立欲求行動を承認しにくい要因と考えられる内容も得られた。これまで述べてきたように、子どもの自立欲求行動を保護者が承認しにくい要因としての実態について明らかにすることは、自立欲求行動の発達を考えるうえで重要な視点であると考える。

家原（2015）は、本研究の予備調査として自立欲求行動と依存対象である保護者の養育態度の関連について検討を行ったが自立欲求行動との関連は認められなかった。実態調査段階であり、自立欲求行動傾向の高低が性格に測定できていない段階での検討であるため、保護者の養育態度との関連が完全に否定されたわけではないが、その他の要因も新たに検討していく必要があると考える。

その他の要因として、子ども側の要因との関連も興味深いものである。家原（2015）は、自立欲求行動と子どもの性別での関連を検討した結果、身辺自立

欲求行動と手伝い欲求行動いずれも男児より女児に高い傾向が示された。これらの結果により、子ども側の性差、個人差は自立欲求行動に何らかの関連があるように考えられる。

本研究の予備調査において、自立欲求行動として生活場面における自分で自分のことをしたがるという主に身辺自立についての欲求と、家庭での手伝いなどを欲する手伝い欲求の 2 つに分類して自由記述による実態調査を行った（家原，2015; 家原・鎌田，2015，2016)。この予備調査により、幼児期の子どもをもつ保護者が経験してきた子どもの自立欲求行動内容が明らかになってきた。しかし、予備調査は質問紙であったため、自立欲求行動と考えられる行動が記述されてはいるが、その行動が具体的にどのようなものなのか戸惑うことが多く、詳細な行動内容について調査できていない。そこで本研究では、予備調査で得られた行動が具体的にどのようなプロセスで発現してくるのかに関心をもり、子ども側の要因として子どもの気質と自立欲求との関連に関心を持った。

1，2．目的

本論文での目的 1 として、今回予備調査で得られたデータをもとに自立欲求行動質問紙を作成し、保護者への半構造化面接による調査によってより具体的な行動を明らかにする。

また、上述したように保護者側の要因や実態を把握することも自立欲求行動の発達を考える上で重要な視点であると考え、親子関係の中で子どもの自立欲求行動の確立の道筋を今後検討する。そのため、子どもの自立欲求行動を保護者が承認しにくい要因として保護者の養育背景を、自立欲求行動の発現を左右する要因として子どもの気質を検討することを第 2 の目的とする。子どもの気質に関しては、Carey らが作成した気質質問紙である BEHAVIOR STYLE QUESTION NAIRE の日本語版として佐藤・吉田（1982）が作成した「子どもの行動の調査―3～7 歳児用（BSQ)」を使用して調査を行う。これは、Thomas and Chess が養育者との構造化された面接によって気質概念に対応した行動を聞き取り、気質を把握するという方法を行って子どもの気質特徴を明らかにしたものを基にしたものである。

1，3．予想される社会貢献

本研究の研究結果を元に、自立欲求行動とその親の対応を明らかにすることで、自立欲求の重要性を養育者や保育士などの子どもの成長にかかわる大人に伝えることで、子どもの自立欲求を尊重する方法を考えるきっかけになり、子どもの自尊感情の向上など子どものよりよい発達や親子関係につながると考えられる。

2，方法

2，1．調査協力者

大阪府内に住む乳幼児期の子どもの保護者を調査対象とし、協力を依頼した。保護者 12 名（女性 12 名，平均年齢 33.5 歳，SD=3.9）であった。対象となる子どもの内訳は、男児　5名，女児 7名の計 12名（平均月齢　45.7ヶ月，SD=21.0）であり、園入所年齢は平均 2.5 歳，SD＝1.6（保育園通園児 3 名，幼稚園通園児 5 名，家庭保育児 4 名）であった。各調査協力者（母子ペア）の属性については Table1 のとおりである。

Table1　調査対象母子ペアの属性

母子ペア	記入者年齢	続柄	子月齢	子どもの性別	出生順位	兄弟構成	保育状況
A	31	母親	42	女	第1子	なし	保育園
B	31	母親	33	女	第1子	なし	家庭保育
C	28	母親	33	男	第1子	妹1人	家庭保育
D	31	母親	13	男	第1子	なし	保育園
E	32	母親	53	女	第1子	妹1人	保育園
F	35	母親	52	男	第2子	兄1人，弟1人	幼稚園
G	36	母親	73	女	第1子	なし	幼稚園
H	43	母親	75	男	第1子	弟1人	幼稚園
I	37	母親	77	女	第1子	なし	幼稚園
J	32	母親	34	女	第2子	兄1人	幼稚園
K	31	母親	20	女	第3子	兄2人	家庭保育
L	35	母親	44	男	第3子	兄1人，姉1人	家庭保育

2，2.調査項目

フェイスシート

記入者の年齢、性別と対象となる子どもの年齢、性別を尋ねた。また、対象となる子どもの園への入所年齢、兄弟構成も尋ねた。

自立欲求行動質問紙

前述したように、幼児期の自立欲求についての尺度は現在作成されていない。そのため自由記述による実態調査である予備調査（家原，2015）に基づいて、自立欲求行動として生活場面における自分で自分のことをしたがるという主に身辺自立についての欲求と、家庭での手伝いなどを欲する手伝い欲求の 2 つに分類して自立欲求行動質問紙を作成した。

身辺自立欲求行動は 46 項目、手伝い欲求行動は 43 項目あり、それぞれ「ほとんど 1 人でできる」、「できないがしたがる」、「あてはまらない」の 3 件法によるものである。加えて、現在の状況と過去の欲求表出ピーク時（以下、ピーク時）の行動の達成度や、ピーク時の月齢を明らかにするため、「現在」、「ピーク時」、「ピーク時の月齢」について回答を求めた。質問紙項目、身辺自立欲求については table2、手伝い欲求について table3 に示す。

table2 身辺自立欲求に関する質問項目

問1	自分の食事に調味料をかける
問2	魚の身をほぐす
問3	食事（フォークを使う）
問4	食事（はしを使う）
問5	食事（スプーンを使う）
問6	お菓子の開封
問7	冷蔵庫から物を出す
問8	飲み物をコップに入れる
問9	おかわりを入れる
問10	こぼれたものを拭く
問11	食後の後片付け（流しまで運ぶ）
問12	納豆を混ぜる
問13	ドレッシングをかける
問14	ジャムをぬる
問15	衣服の着脱
問16	靴下を履く
問17	靴を履く
問18	名札をつける（安全ピン）
問19	お尻ふき
問20	自分のおむつ交換
問21	排泄
問22	歯磨き
問23	爪きり
問24	入浴（体を洗う）
問25	入浴（頭を洗う）
問26	ドライヤー
問27	鼻をかむ
問28	手洗い
問29	おもちゃの組み立て
問30	おもちゃの片付け
問31	幼稚園から帰宅後、荷物を決まった場所に片付ける
問32	自分の洗濯物だけをたたむ
問33	ハンカチを畳む
問34	台に上り高いところのものを取る
問35	おしゃれに関すること（ヘアアレンジや服選び等）
問36	宿題や習い事を言われなくてもする
問37	靴洗い
問38	ブランコに乗る
問39	シートベルトをつける
問40	エスカレーターに乗る
問41	自転車に乗る
問42	三輪車に乗る
問43	車の乗降
問44	自分の荷物もち
問45	傘をさす
問46	傘をたたむ

table3 手伝い欲求に関する質問項目

問1	指示されたものを取りに行く
問2	米とぎ
問3	掃除機のコードを直す
問4	荷物を運ぶ(自分以外)
問5	ゴミの日のゴミ捨て
問6	拭き掃除
問7	タオルを畳む
問8	洗濯物を入れる
問9	洗濯ボタン押す
問10	食器運び
問11	テーブルをふく
問12	お皿を食器棚に片付ける（台に乗る）
問13	ハンガーを外す
問14	ゴミ箱にゴミを捨てる
問15	掃除機を使う
問16	買い物の荷物持ち
問17	冷蔵庫からお茶をだし、注ぐ
問18	ドアの開け閉め
問19	料理
問20	靴をそろえる
問21	洗濯物を干す
問22	洗濯物を畳む
問23	食事の用意
問24	布団を畳む
問25	食後の後片付け
問26	年下の兄弟の世話
問27	郵便物を取りに行く
問28	食器洗い
問29	服をタンスにしまう
問30	配膳
問31	掃き掃除
問32	部屋の掃除
問33	回覧板を回す
問34	風呂掃除
問35	新聞を取りに行く
問36	玄関掃除
問37	テレビを消す
問38	お風呂のスイッチを押す
問39	靴を洗う
問40	靴下を洗う
問41	花の水やり
問42	歯ブラシ取る
問43	部屋の電気

日本語版「子どもの行動の調査－3～7歳児用（BSQ)」

子どもの気質に関しては、Carey らが作成した BEHAVIOR STYLE QUESTIONNAIRE の日本語版として佐藤・古田（1982）が作成した「子どもの行動の調査―3～7歳児用（BSQ)」を使用した。これは、活動の水準、規則性、接近性、反応の強さ、気分の質、固執性、順応性、散漫性、敏感性の9つの気質カテゴリーに分類されている（古田，2004)。9つの各気質カテゴリーについては Table4 に示す。

Table4. BSQ気質カテゴリー

カテゴリー	気質特徴
活動の水準	子どもの活動に現れる運動のレベル、店舗、頻度、および活動している事案とじっとしている時間の割合、活発さの程度である。
規 則 性	睡眠、食事、排泄、動きと休息などの生理的機能の周期性の程度である。
接 近 性	食べ物、人、おもちゃ、やり方など何であれ新しい刺激に対して近づいたりさわったりするか、しり込みしたりいやがるかという程度である。
順 応 性	新しい場面、または環境が変化したときに、慣れる速やさの程度である。
反応の強さ	泣くにせよ、笑うにせよ、その反応は強くはっきり現すか，穏やかであるかの程度である。
気 分の質	明るいか 、友好的か 、ご機嫌がよいか 、親和的な行動の量と不愉快な行動の量の割合である。
固 執 性	注意の集中と持続、妨害がはいったときに，それまでしていたことに戻れるか，別の活動に移るか、またある活動に携わる時間の長さについてである。
散 漫 性	気の散りやすさ。外的な刺激によって，していることを妨害されやすいかどうかの程度である。
敏 感 性	反応の閾値と呼ばれ，反応を惹き起こすに要する刺激のレベルである。刺激閾の他に弁別閾もこのカテゴリーに含めるとされている。

古田（2004）

以上9つの気質カテゴリーのうち、自立欲求行動の確立の道筋を検討する上でふさわしい内容を指導教員とともに検討した。また、BSQ は全 100 項目からなる質問紙であり、自立欲求行動質問紙、面接調査に加えると調査対象者への負担が大きくなると考えられた。そのため本研究では、これら9つの気質カテゴリーのうち「活動の水準」「気分の質」「散漫性」「敏感性」といった4つのカテゴリーに関する質問項目 46 項目を除き、自立欲求行動の確立と関連があると仮定した「規則性」「接近性」「順応性」「反応の強さ」「固執性」という5つのカテゴリーに分類される質問項目 54 項目を用いた。以下に仮説を示す。

1. 規則的な気質を有する子どもの保護者は、子どもの行動を予測しやすいことが考えられる。そのため、子どもの自立欲求表出時においても、ある程度の事前予測をたてることが可能であり、欲求行動を受け入れやすく、保護者の感じる子どもの自立欲求行動は多く表出されるのではないかと考えられる。規則性得点の低い子どもは、「規則的」カテゴリーに分類される。

2. 気質が接近的な傾向の子どもは、保護者がしていることや兄弟の行っていることなどに対して積極的に近づいたり、やってみようとする行動が現れることが考えられる。そのため、接近性の高い子どもの保護者の感じる自立欲求行動は多く表出されるのではないかと考えられる。接近性得点の低い子どもは、「接近的」カテゴリーに分類される。
3. 食事場面や衣服の着脱などの日常生活場面、行動において、慣れにくい子どもは、保護者が促さなければ行わない、保護者が行ったほうが早いと先に行動してしまうという場面が多いのではないかと考える。そのため順応性の低い子どもの自立欲求行動は少ないことが考えられる。順応性得点が高い子どもは、「慣れにくい」カテゴリーに分類される。
4. 反応が強い子どもは、自立欲求表出時の「○○がする」などといった行動や、それを保護者が拒否した際の泣きなどの反応が強いことが考えられる。そうした欲求拒否時の反応の強さを経験した保護者は、子どもの言うように自立欲求行動をさせるようになるのではないだろうか。そのため反応が強い子どもの自立欲求行動は、多くなるのではないかと考える。反応の強さ得点が高い子どもは、「反応が強い」カテゴリーと分類される。
5. 固執的な気質の子どもは、自立欲求行動を行う際に、できていないことや難しいことであっても諦めずに集中し、何時間もその行動をし続けるのではないかと考え、時間に制限のある保護者は、欲求を受け入れにくいことが考えられる。そのため、保護者が感じる自立欲求の強さは高いのではないかと考える。固執性得点の低い子どもは、「固執的」カテゴリーと分類される。

2，3．面接手続き

面接準備

同意書 1 枚、質問紙（フェイスシート・BSQ・自立欲求行動質問紙）8 枚、面接用フローチャート 1 枚、面接内容聞き取り用紙 1 枚をそれぞれ 1 部ずつ用意した。

面接調査の方法と手続き

面接調査は、対象者の負担を軽減するために対象者の希望した場所で行った。実施回数は 1 回、実施時間は、質問紙記入時間も含めて 30 分～1 時間であった。

面接者は、調査協力者へ同意書と質問紙を配布した。配布の際、調査協力者には調査の説明及び、データについての守秘義務について、「この調査は、お子様の家庭での生活において、自分のことやお手伝いを自らしたがる傾向について研究するものです。匿名回答ですのでお名前を記入する必要はございません。結果はお子様や家庭によって異なる種類に分類され、様々な個別状況を検討しますが、一家庭の全体像を検討したり、公表することはありませんので、ご理解とご協力をいただければ幸いです。本調査にご協力いただける方は、同意書の「同意する」に丸をつけ、回答した日付を記入してください。同意いただけ

ない方は、「同意しない」に丸をつけてください。」と教示を行った。調査協力者が同意書に同意の記入を行った後、質問紙への回答を求めた。

調査協力者が質問紙へ記入後、自立欲求行動に関する質問項目のなかで、調査協力者が印象に残っているものを尋ねた。加えて、面接の際に面接用フローチャート（Table5）と聞き取り用紙を用いて、自立欲求行動表出時の保護者の思いなどについて尋ねた。

面接内容

面接内容として自由度の高い半構造化面接を行い、できるだけ自然な会話形式でやりとりがなされるように努めた。また対象者間での面接内容をある程度統一するために、面接調査の実施に先立ち、具体的な質問項目や流れ等をまとめた面接フローチャート（Table5）を使用した。実際の面接場面では、質問内容の枠内であれば可能な限り対象者の語りを尊重した。

2，4．倫理的配慮

調査目的、データ処理時の個人情報の非特定、調査目的へのデータ使用などを口頭・文章で説明を行い、同意書の回答をもって調査への同意を得た。

2，5．検討方法

日本語版「子どもの行動の調査－3～7歳児用（BSQ)」

各項目に対する評定値（6段階）の平均値を算出してカテゴリー得点とし、対象児のカテゴリー得点を BEHAVIORAL STYLE QUETIONNAIRE PROFILE SHEET（付録1参照; Sean C. McDevitt, &William B. Carey,1975）で示されている標準値（平均±SD）と比較することにより,各カテゴリーにおける程度の高低を算出した。その程度の高低を基にカテゴリーごとに分類した。

自立欲求行動質問紙

自立欲求行動質問紙から得られた回答をもとに身辺自立欲求行動、手伝い欲求行動の各項目別に月齢表を作成し、自立欲求行動の月齢間での変化を示した。作成にあたって、各項目において「ほとんど1人でできる」、「できないがしたがる」、「あてはまらない」の3件法のうち、「ほとんど1人でできる」、「できないがしたがる」の2つの回答をもとに現在の状況、過去の欲求表出ピーク時についての月齢表を作成した。

面接内容

自立欲求行動として2つに分類した生活場面における自分で自分のことをしたがるという主に身辺自立についての欲求と、家庭での手伝いなどを欲する手伝い欲求、フローチャートを基に聞き取った具体的な回答内容に関して、各回答項目ごとにカテゴリー分けを行いその具体的な行動内容や回答内容の回答数、割合を算出した。

Table5　面接用　フローチャート

☆　質問紙に記入後、各項目のより具体的な内容について聞き取り

☆「イヤイヤ」「ジブンデジブンデ」とよく言いますか。

感情

「こちらに記入いただいたように、自分でしたがるようになった時、どのように感じられましたか？」

ポジティブ

具体的な内容・エピソード

「時間がない時は、どう思われましたか？」

ネガティブ

具体的な内容・エピソード

「時間がないときはそう思われますよね。
では、時間がある時は、どう思われましたか？」

対応方法

「お子様が自分でしたがるようになった時、どのように対応されていましたか？」

ポジティブ

具体的な内容・エピソード

ネガティブ

具体的な内容・エピソード

- 仕上げをする → 声をかけてするのか。だまって気づかれないようにする
- 気が済むまでやらせる → 最長でどのくらいまで待ったか。
- フォローをする → どのタイミングでフォローをしていたか。
- 見守る → 側で見守るのか。手は全く出さないのか。

「できなかった時はどのように対応されていますか？」

「子どもには難しいと感じた時はどうされていますか？」

「別のことをお願いしたことはありますか？」 → それはなぜですか？（時間かかる・危険など）

「やりかたを教えることはありましたか？」 → 事前に教えますか。
一度自分でさせてから教えますか。

時間

「時間があるときとない時での違いはなにかありますか？」

きょうだい関係

「きょうだいがいることで、なにか感じることはありますか？」

判断基準

させるかさせないかの判断基準

3，結果と考察

3，1．身辺自立欲求行動の欲求表出月齢について

自立欲求行動質問紙から得られた回答をもとに身辺自立欲求行動の各項目において、「ほとんど 1 人でできる」、「できないがしたがる」、「あてはまらない」の 3 件法のうち、「ほとんど 1 人でできる」、「できないがしたがる」の 2 つに限定し現在の状況、過去の欲求表出ピーク時の回答をもとに月齢表を作成した。作成したものを Figure1～46 に示す。

Figure1～46 の結果から、全体を通して 18 ヶ月（1 歳半）ごろから始まり 54 カ月（4 歳半）ごろまで広がって身辺自立欲求行動が多く表出していることが示された。また、「ほとんど 1 人でできる」との回答は、そのうちのほとんどの月齢に幅広く示されているが、「できないがしたがる」の回答に関しては、最小 11 カ月から最大 48 ヶ月（4 歳）までの回答となっており、4 歳以後では「できないがしたがる」との回答は得られなかった。次に、Figure1～46 の各項目ごとに示された内容を述べる。

Figure6.8.15.16.17.28.29.32.33.44.45.46 の項目において、「ほとんど 1 人でできる」「できないがしたがる」の回答は共に、33 ヶ月児の行動が多いことが示された。これは、33 ヶ月児をもつ調査協力者である B、C が現在の欲求行動とピーク時が同じであると回答していることからの結果とも考えられる。それと同時に、33 ヶ月は 2 歳 9 ヶ月という第 1 次反抗期の時期と合致している。第 1 次反抗期に入っている 2 歳前後の子どもをもつ保護者は「ジブンデジブンデ」といった自立欲求行動も多いと述べており、このことが今回の結果に反映していることが考えられる。

Figure31.36.37.の項目における回答は 6 件以下と全体の半分以下の結果であった。これは、幼稚園や保育所に通う子どもにあてはまる項目内容であり、今回の調査では保育園通園児は 3 名、幼稚園通園児は 5 名であり、やや少なかったことも本結果の要因の一つとして考えられる。

Figure11「食後の後片付け（流しまで運ぶ）」の項目において、11 ヶ月児が「できないがしたがる」との回答が示された。11 ヶ月児は、つかまり立ちからひとり歩きへ移行していく時期であり、まだ満足に歩くことは困難であるように思われる。こういった 11 カ月児の子どもが食器を持って運ぶという行動は興味深いものである。この行動における具体的なエピソードに関しては、面接内容で後述する。

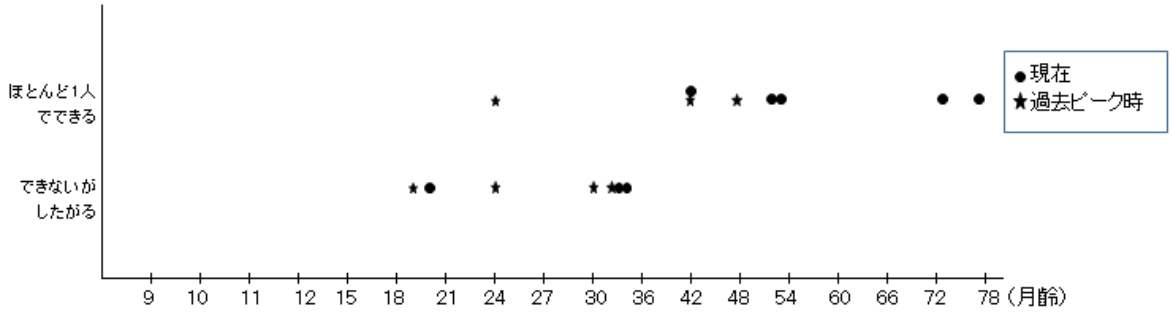


figure1 自分の食事に調味料をかける

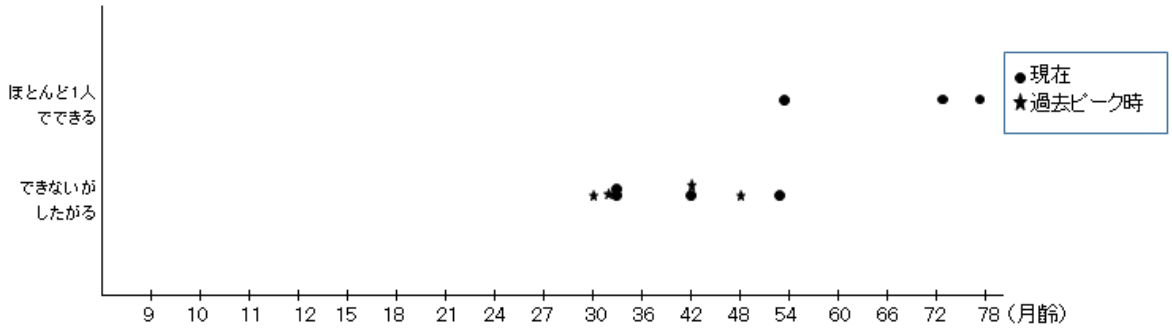


figure2魚の身をほぐす

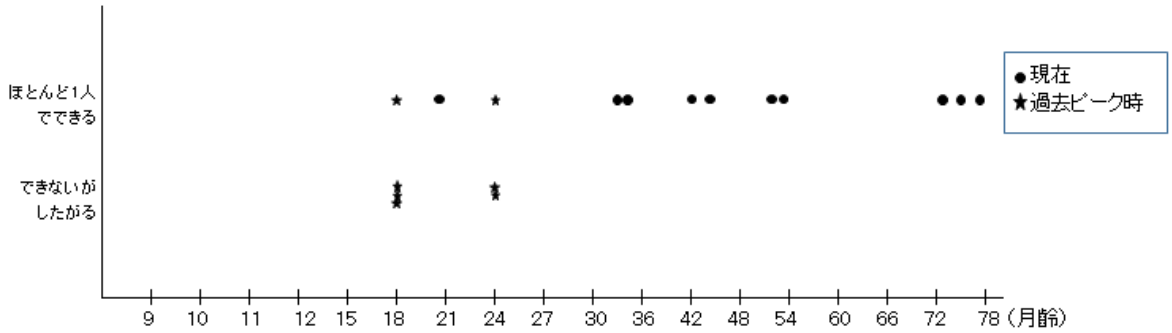


figure3食事(フォークを使う)

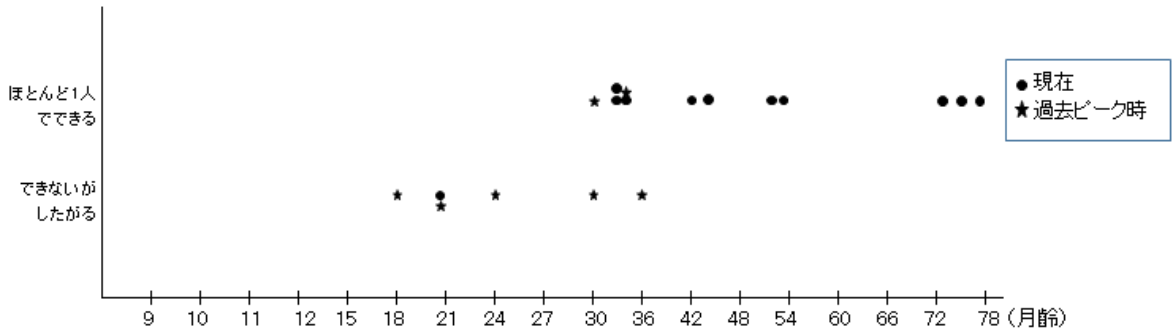


figure4食事(はしを使う)

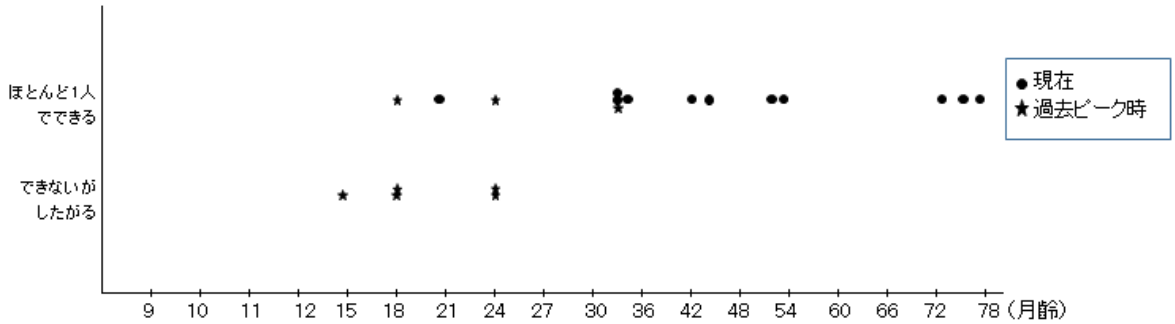


figure5 食事(スプーンを使う)

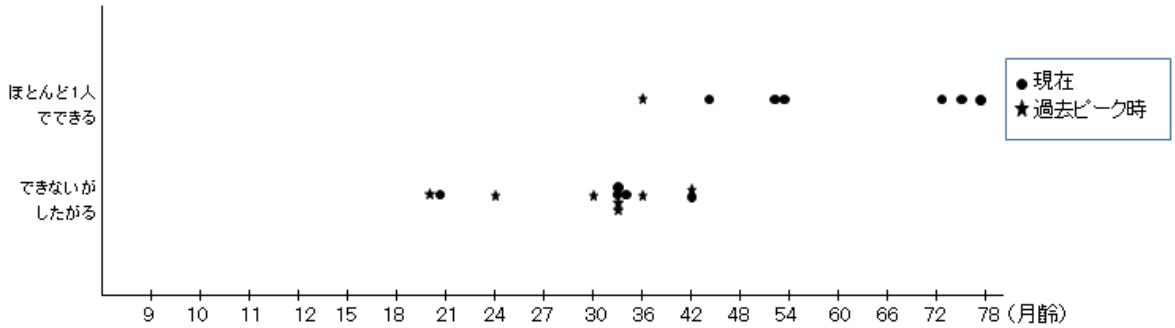


figure6お菓子の開封

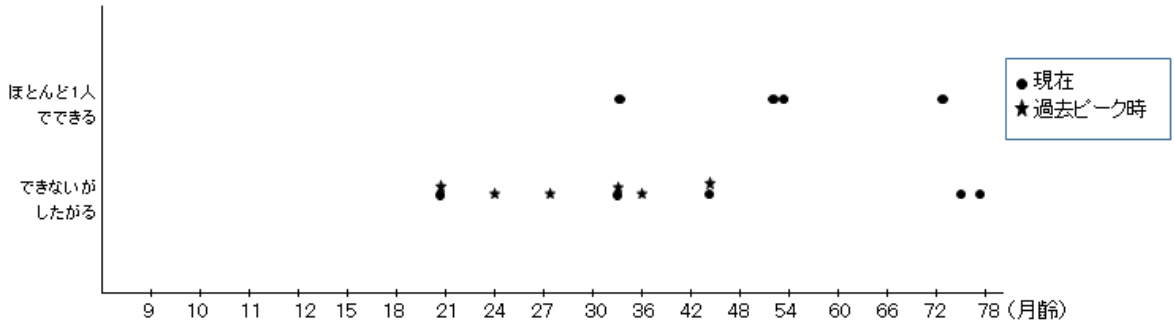


figure7冷蔵庫から物を出す

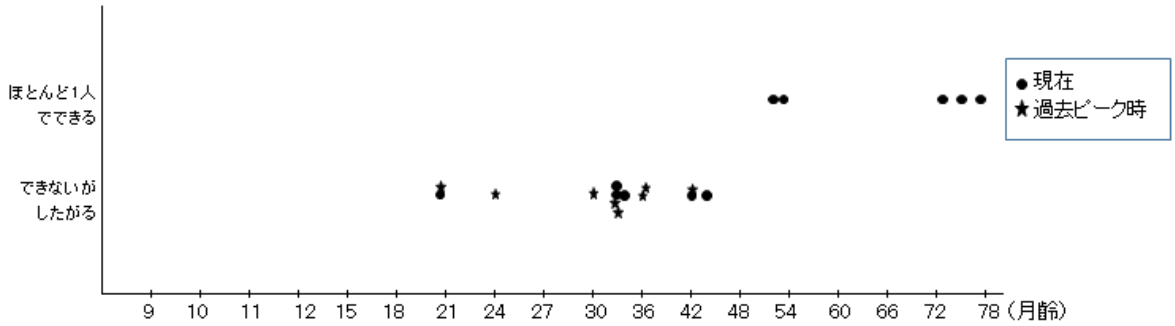


figure8飲み物をコップに入れる

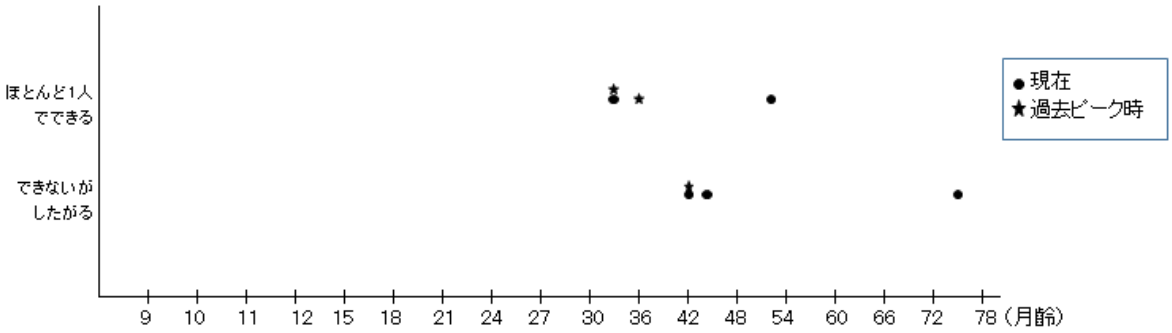


figure9おかわりを入れる

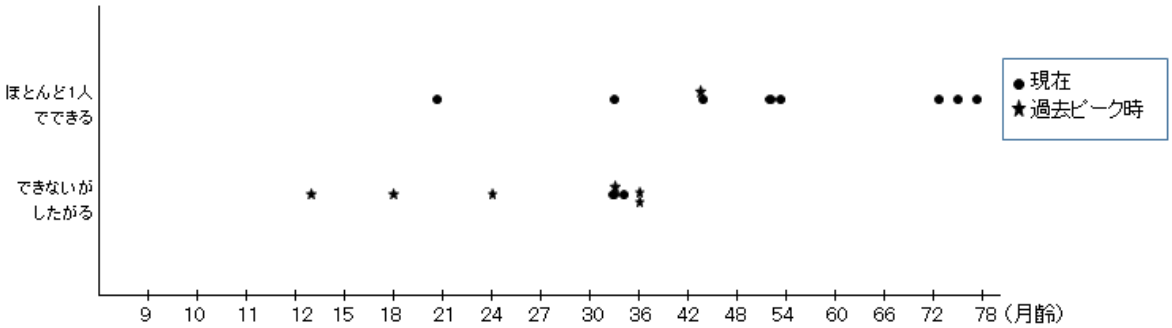


figure10こぼれたものを拭く

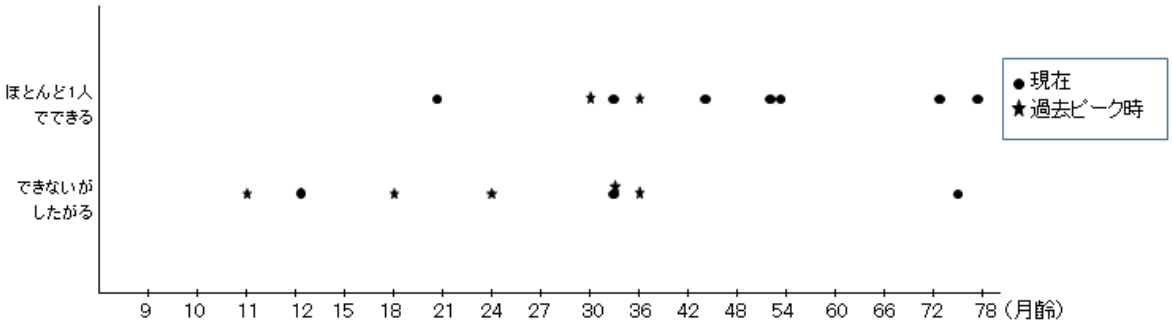


figure11食後の後片付け(流しまで運ぶ)

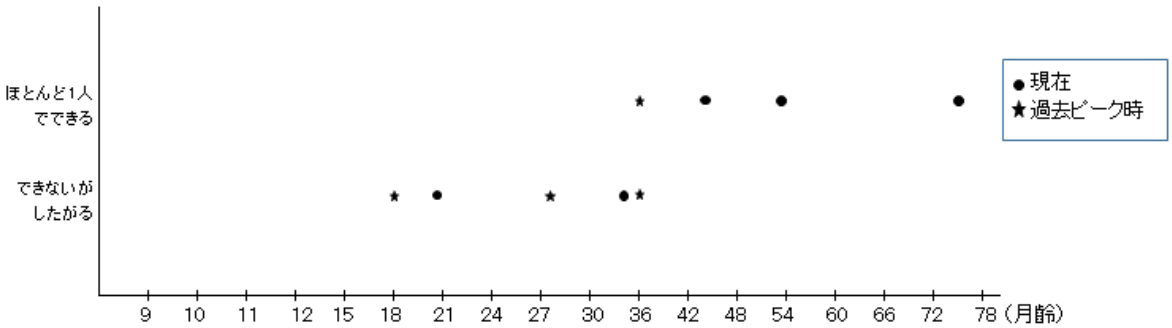


figure12納豆を混ぜる

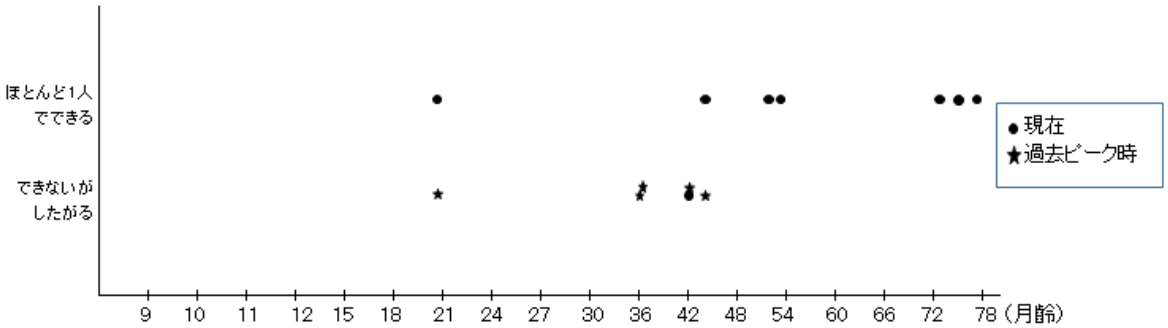


figure13ドレッシングをかける

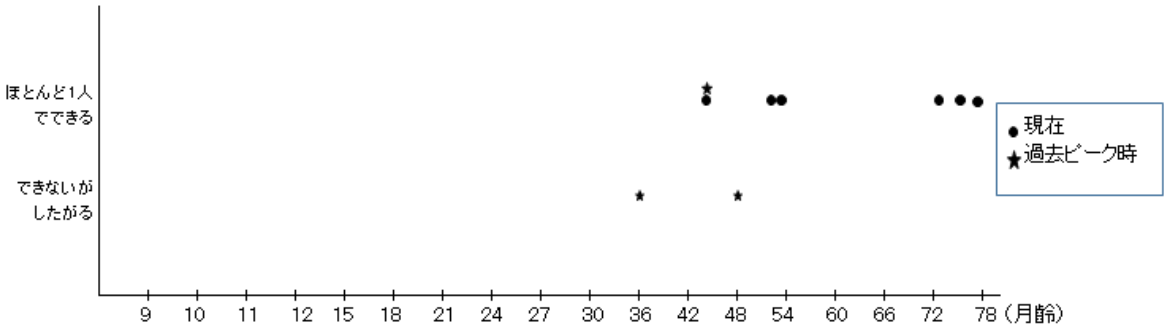


figure14ジャムをぬる

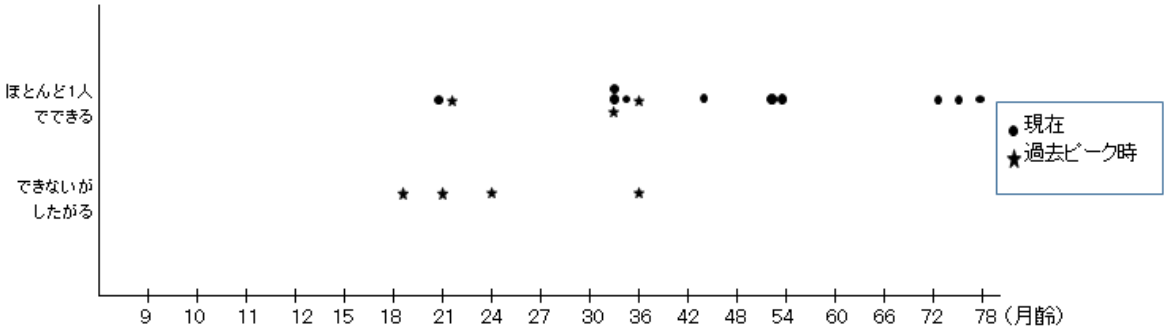


figure15衣服の着脱

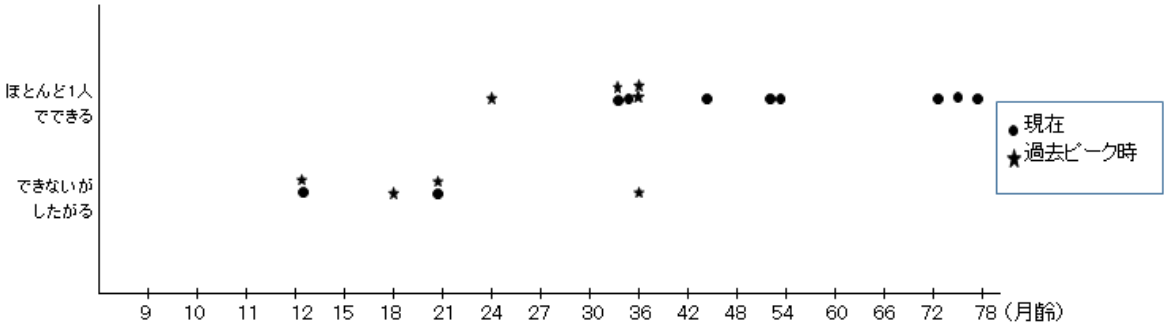


figure16靴下を履く

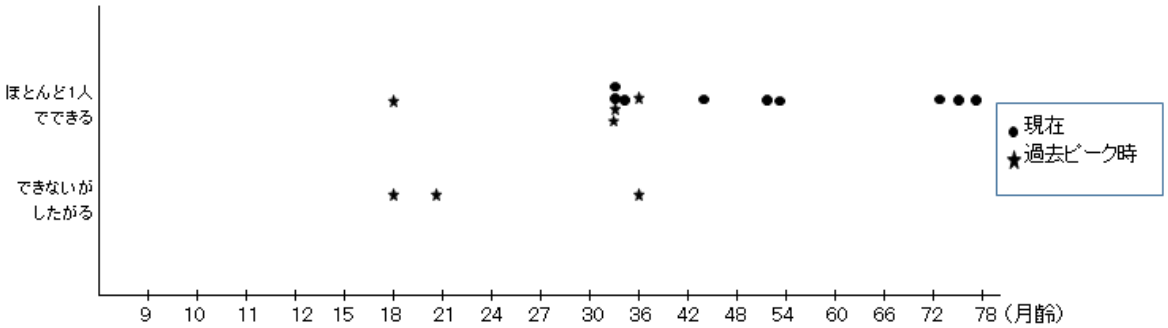


figure17靴を履く

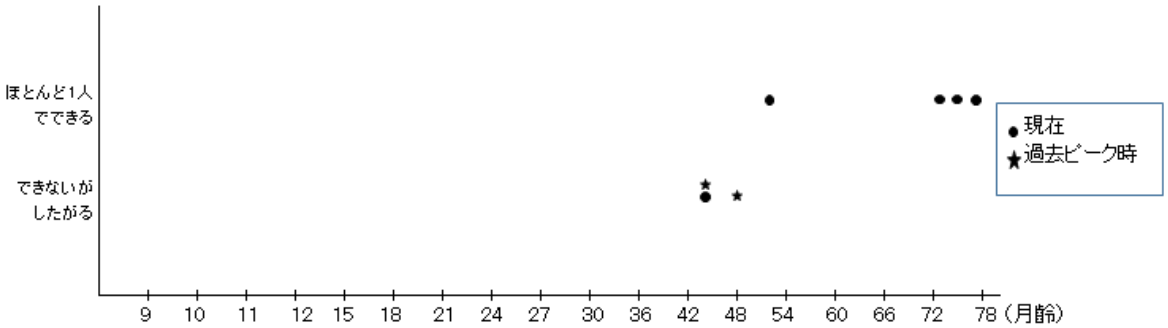


figure18名札をつける(安全ピン)

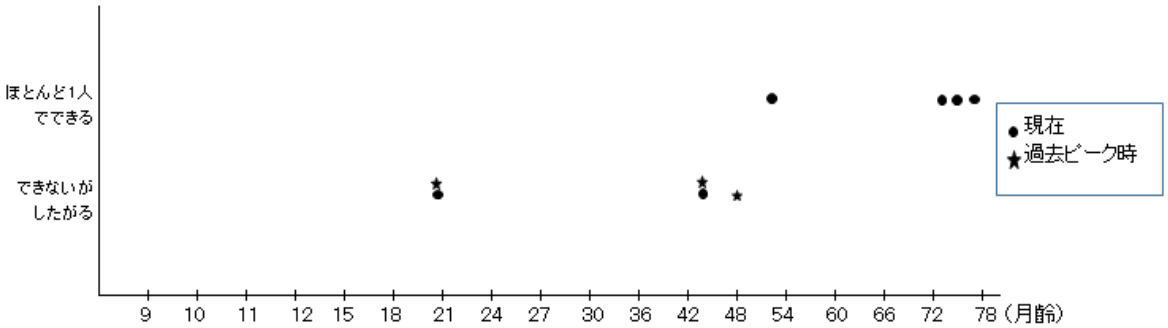


figure19お尻ふき

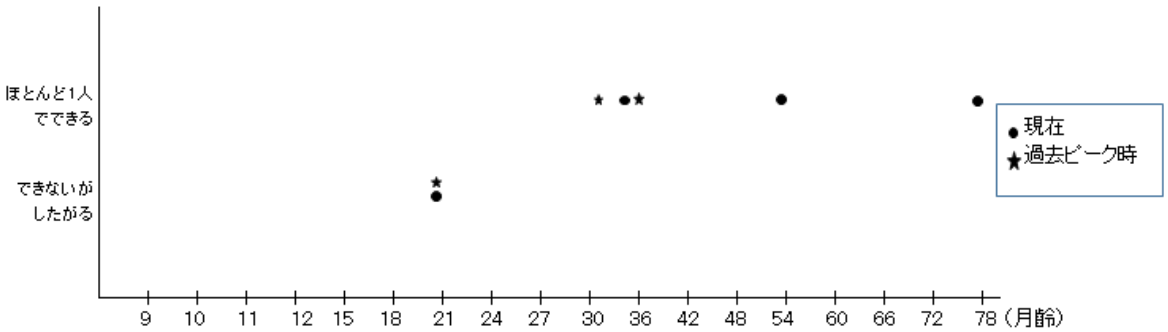


figure20自分のおむつ交換

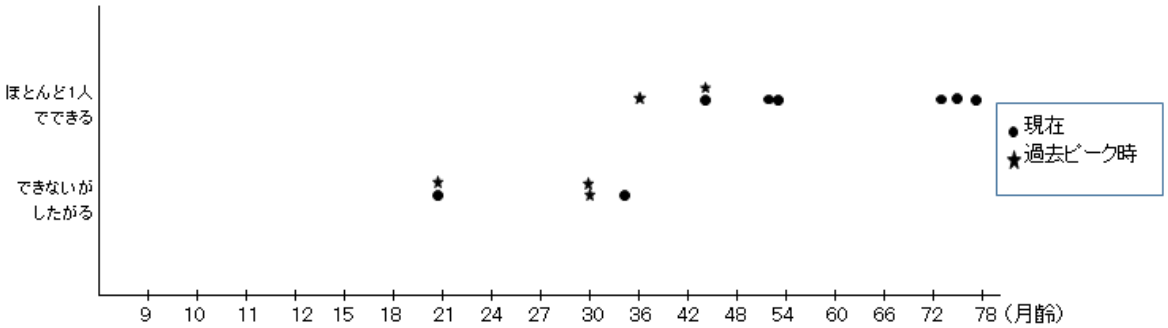


figure21 排泄

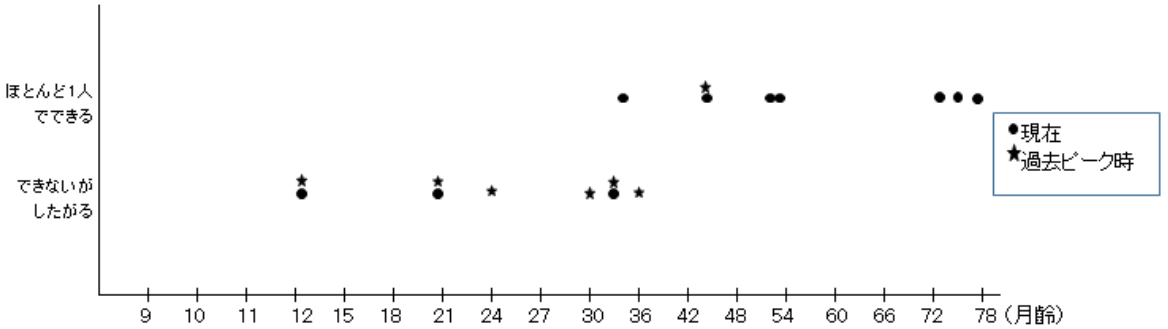


figure22 歯磨き

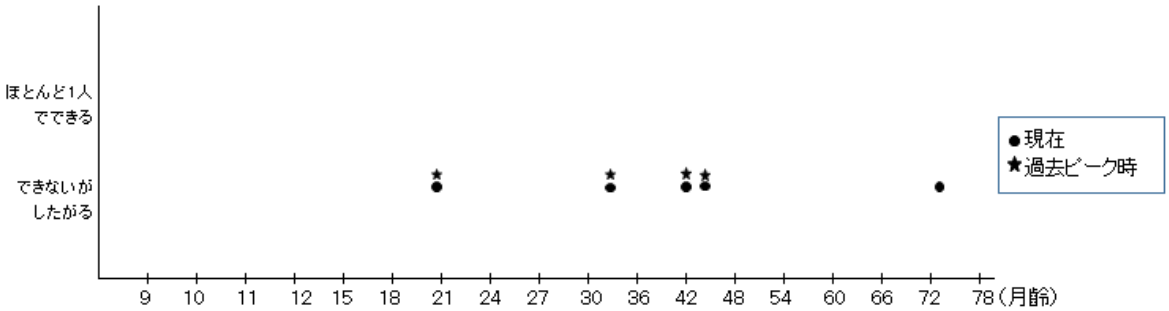


figure23 爪きり

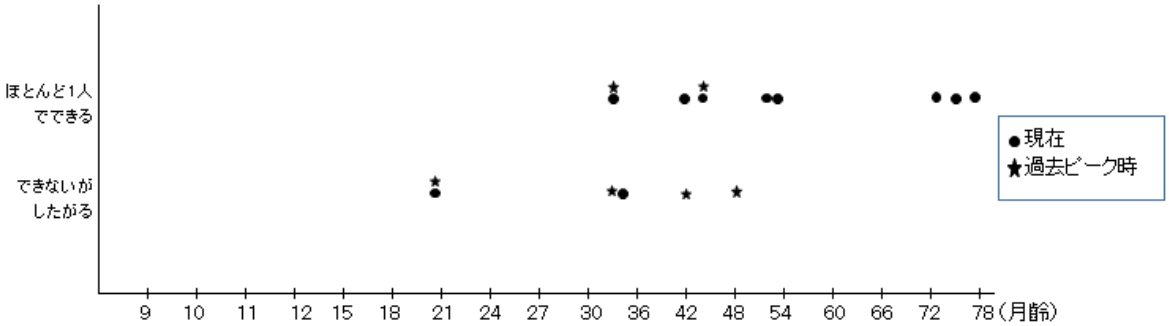


figure24 入浴（体を洗う）

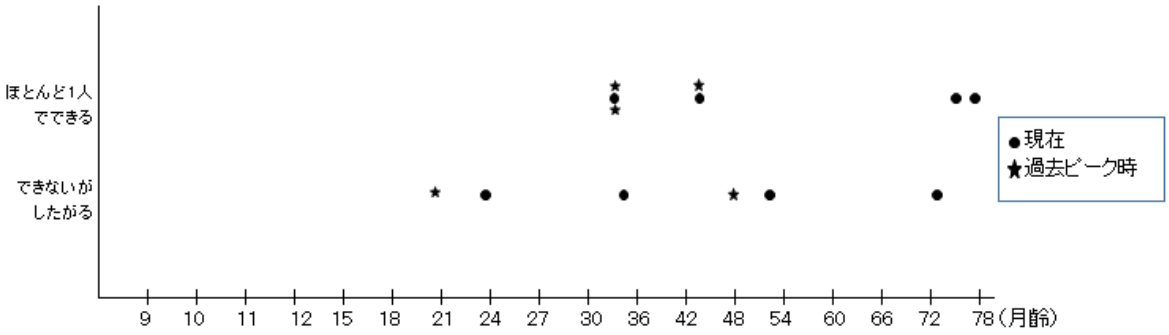


figure25 入浴（頭を洗う）

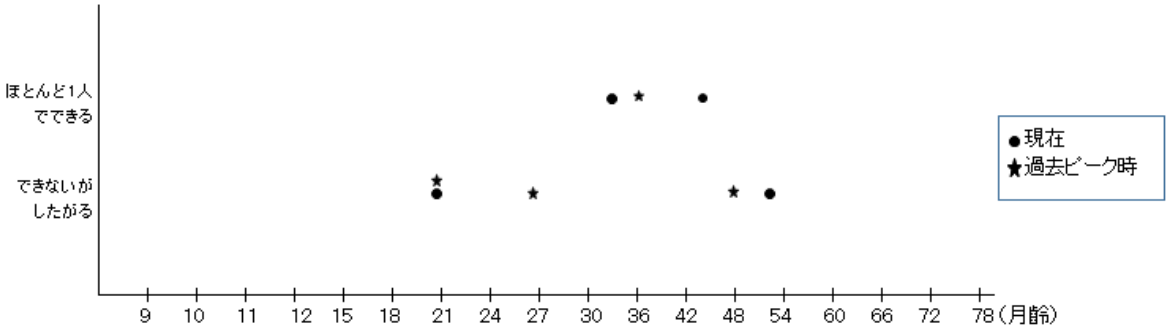


figure26ドライヤー

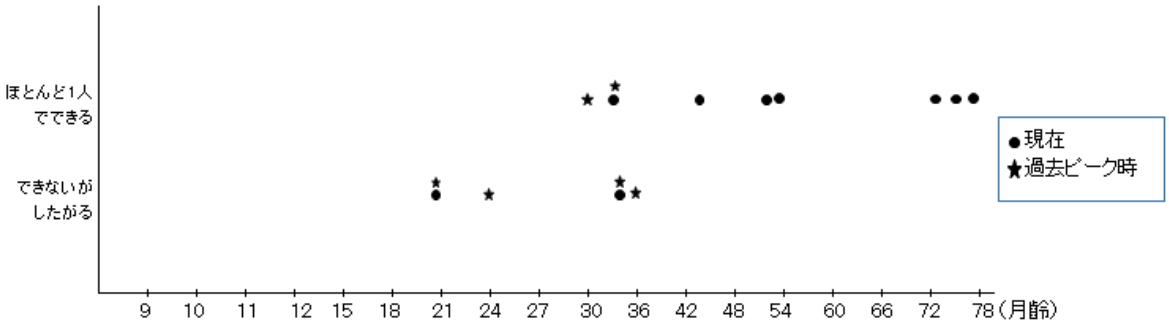


figure27 鼻をかむ

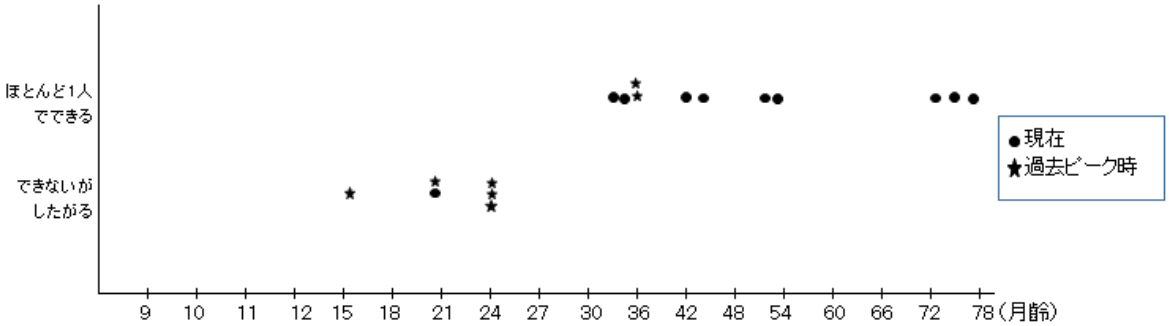


figure28 手洗い

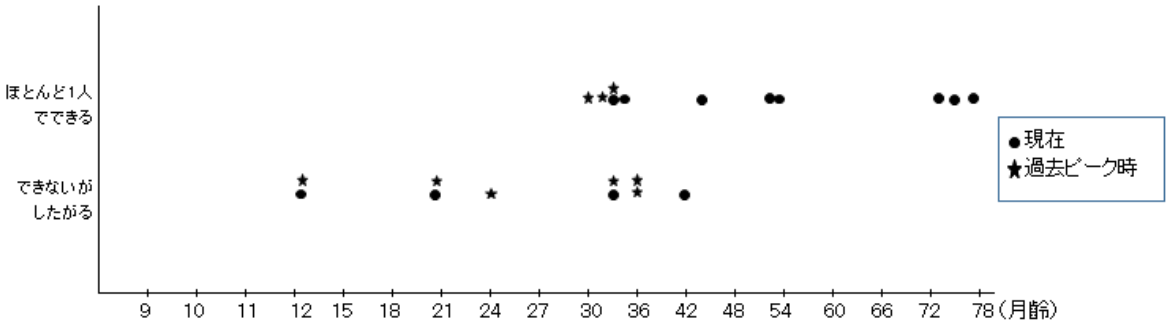


figure29おもちゃの組み立て

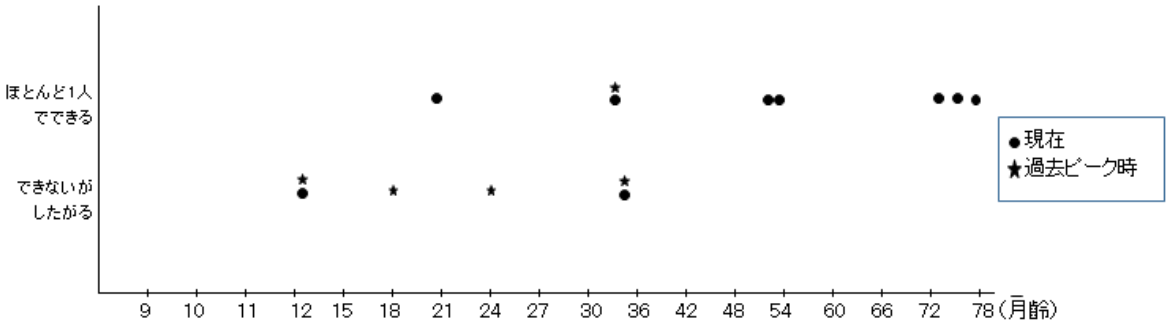


figure30おもちゃの片付け

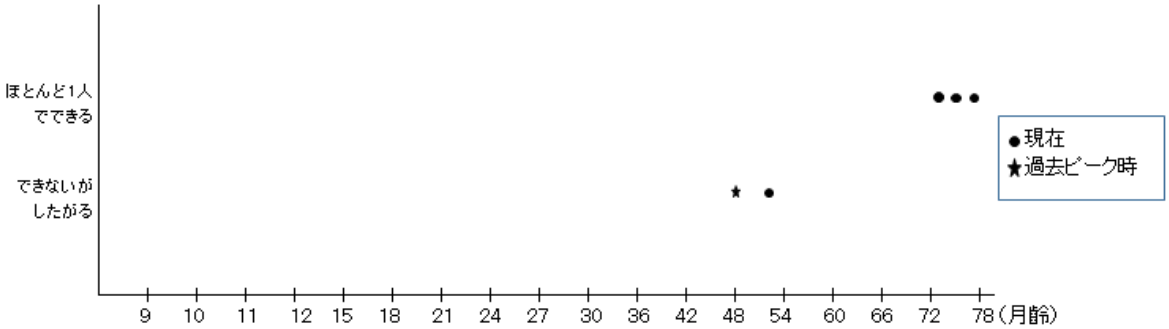


figure31 幼稚園から帰宅後、荷物を決まった場所に片付ける

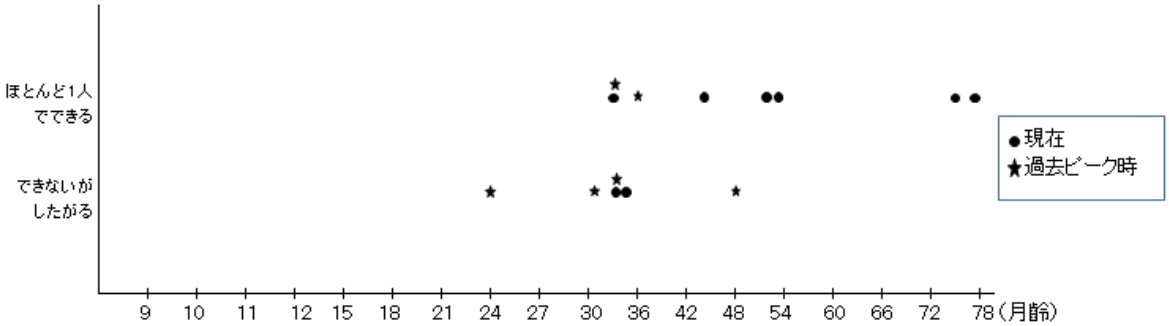


figure32自分の洗濯物だけをたたむ

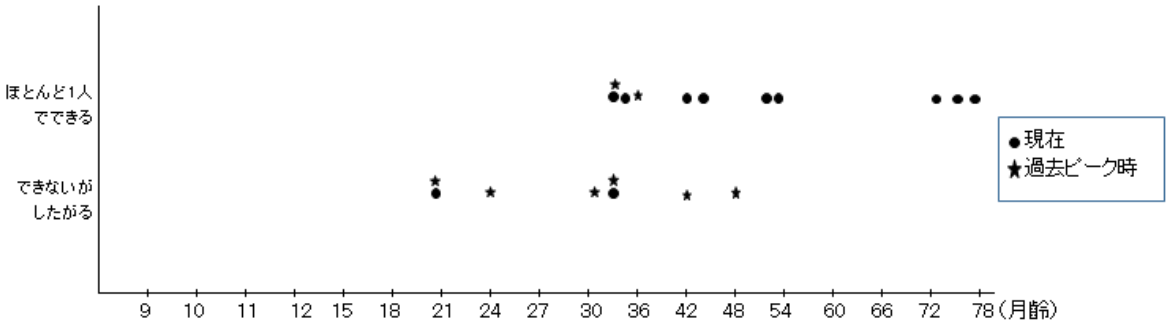


figure33ハンカチを畳む

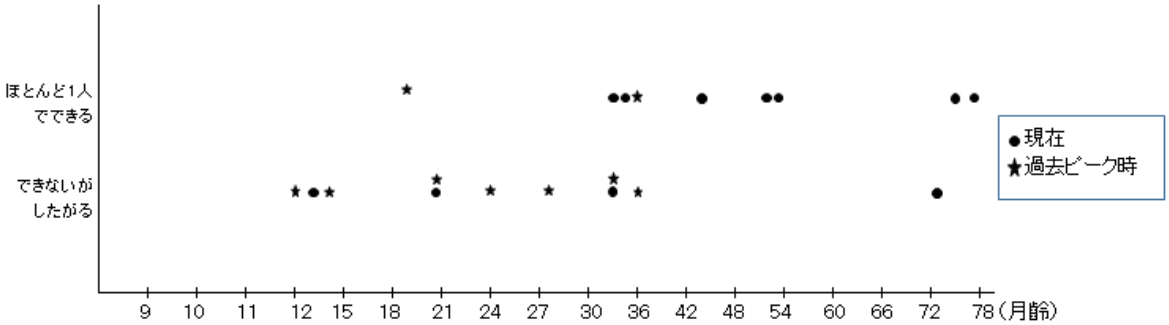


figure34台に上り高いところのものを取る

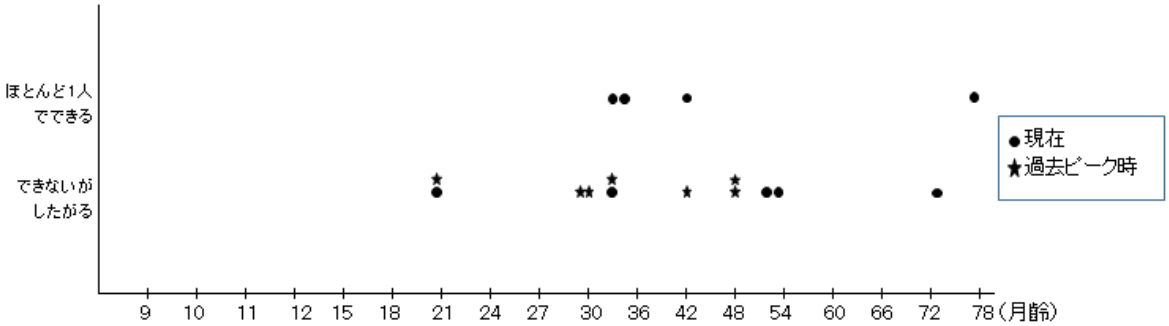


figure35おしゃれに関すること(ヘアアレンジや服選び等)

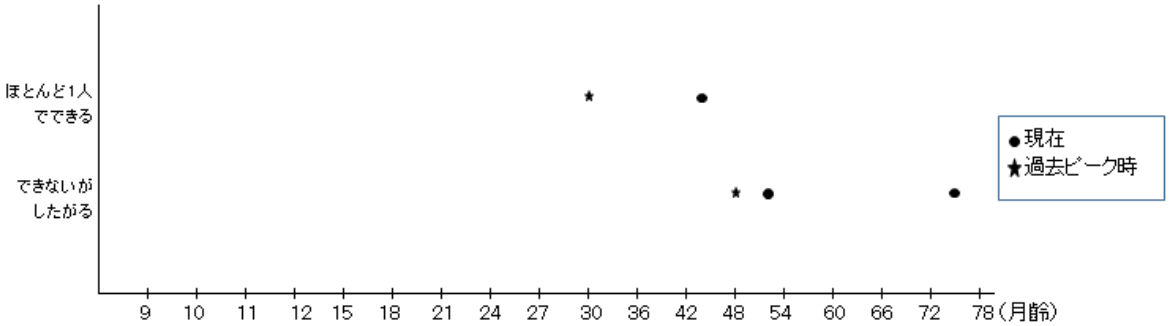


figure36宿題や習い事を言われなくてもする

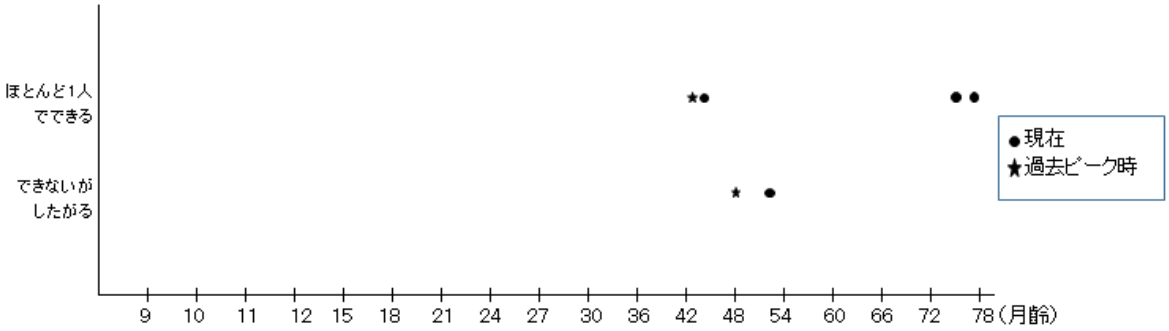


figure37靴洗い

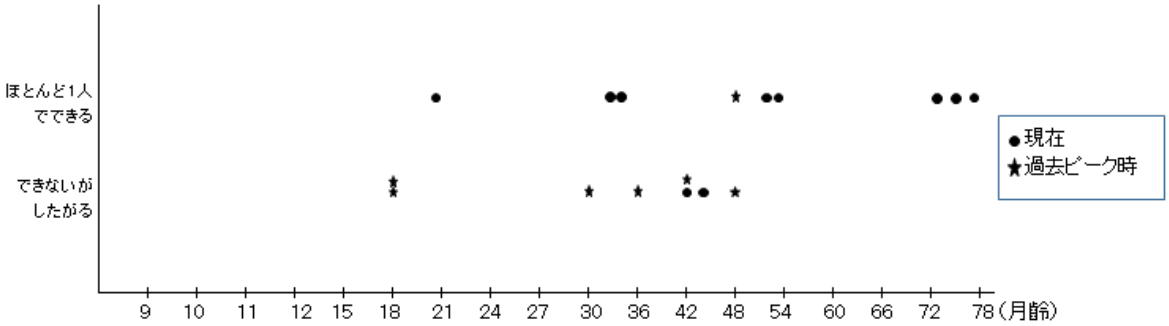


figure38ブランコに乗る

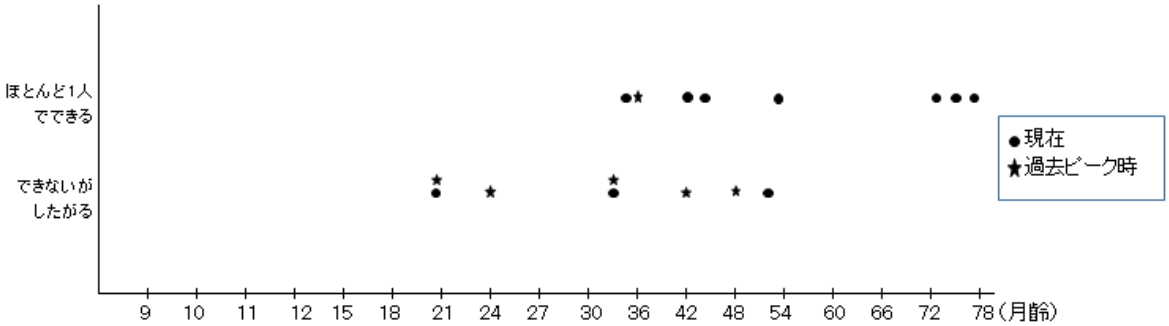


figure39シートベルトをつける

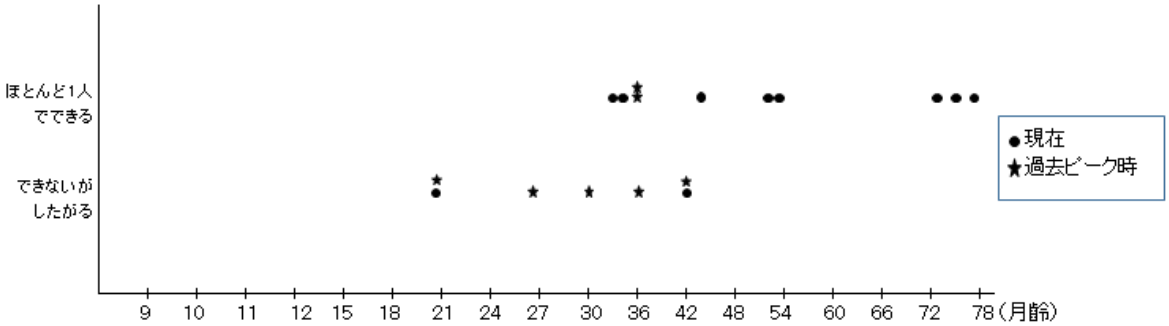


figure40エスカレーターに乗る

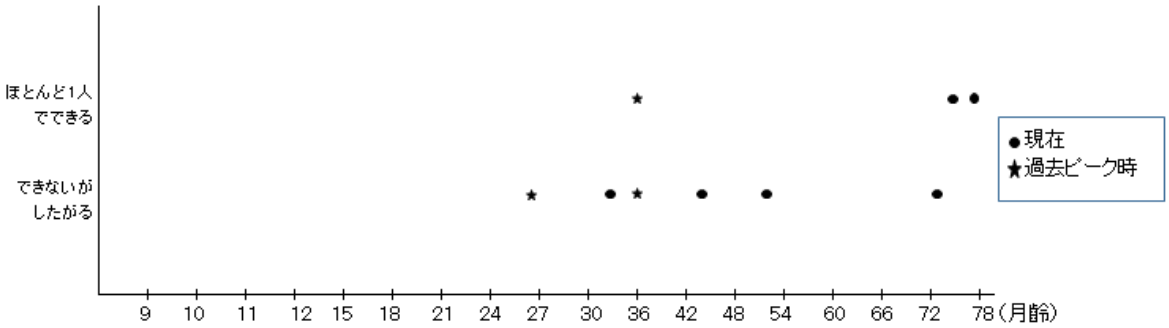


figure41 自転車に乗る

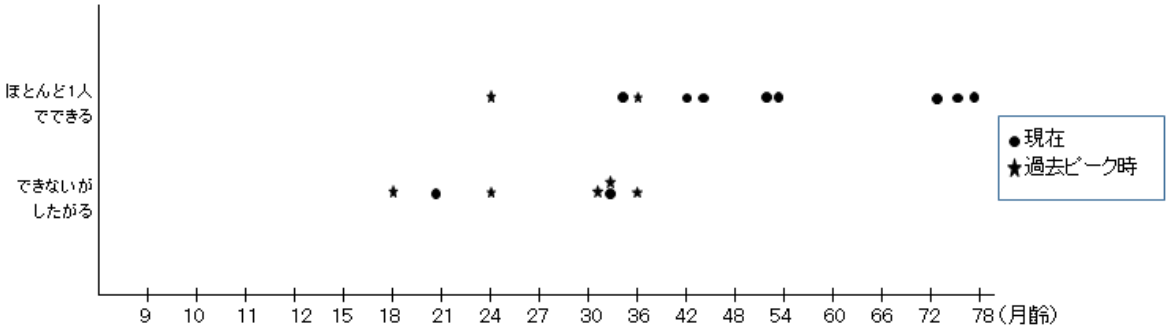


figure42 三輪車に乗る

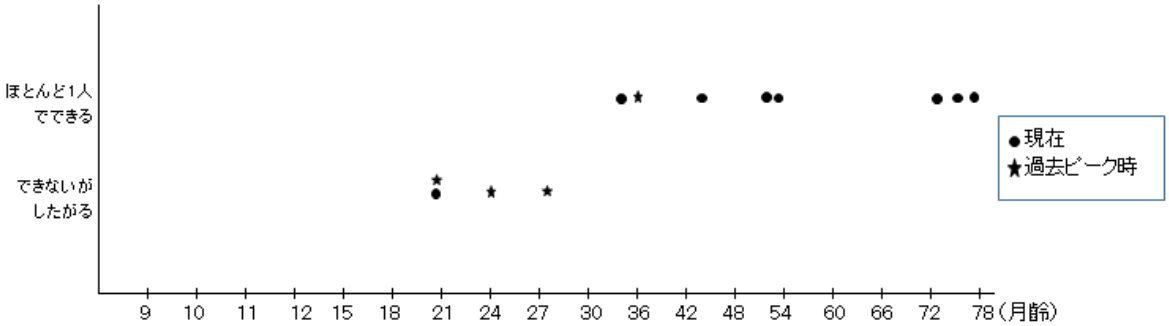


figure43 車の乗降

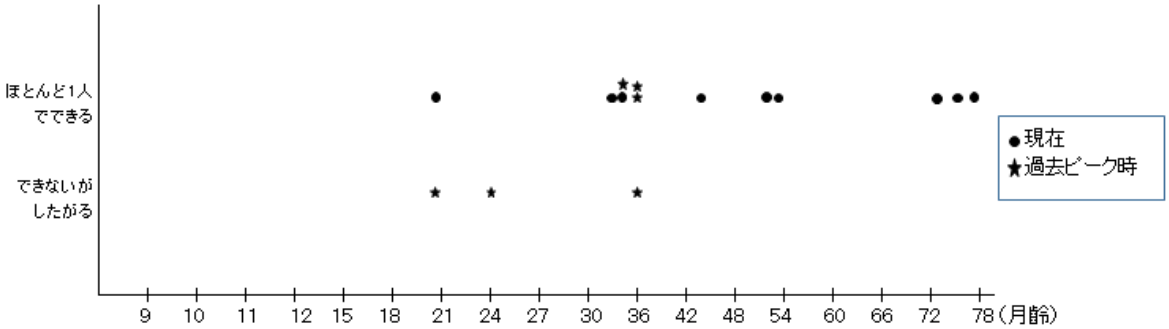


figure44 自分の荷物もち

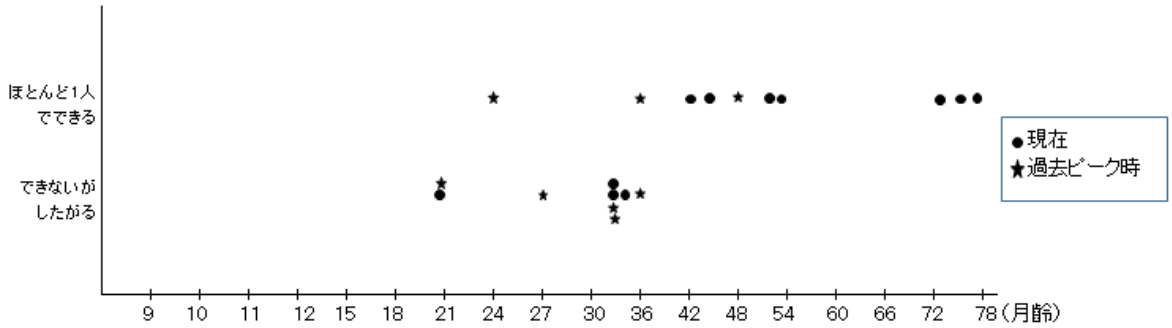


figure45 傘をさす

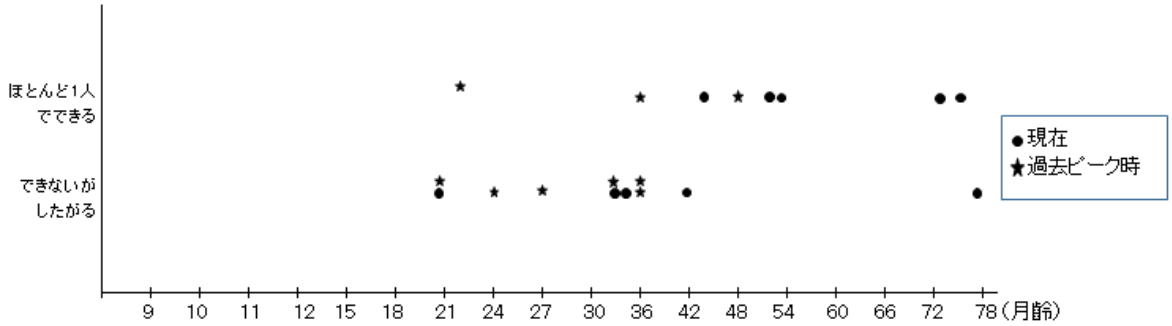


figure46 傘をたたむ

3、2．手伝い欲求行動の欲求表出月齢について

自立欲求行動質問紙から得られた回答をもとに手伝い欲求行動の各項目別に月齢表を作成した。手伝い欲求行動の各項目において「ほとんど 1 人でできる」、「できないがしたがる」、「あてはまらない」の 3 件法のうち、「ほとんど 1 人でできる」、「できないがしたがる」の 2 つに限定し現在の状況、過去の欲求表出ピーク時の回答をもとに月齢表を作成した（Figure47～89）。

Figure47～89 の結果から、全体を通して 18 ヶ月ごろから手伝い欲求行動の表出が増加していることが示された。また、「ほとんど 1 人でできる」、「できないがしたがる」の回答が最小 9 カ月から最大 75 ヶ月までの回答があり、手伝い欲求行動の表出月齢が幅広く示された。次に、Figure47～89 の各項目ごとに示された内容を述べる。

Figure53.56.58.61.63.65.88.89 の項目において、身辺自立欲求行動と同様に「ほとんど 1 人でできる」「できないがしたがる」の回答共に、33 ヶ月児の行動が多いと示された。この結果についても身辺自立欲求行動での考察と同様に、33 ヶ月児をもつ調査協力者である B、C が現在の欲求行動とピーク時が同じであると回答していること、第 1 次反抗期の影響も考えられるのではないか。

Figure57「テーブルをふく」の項目において、9 ヶ月児が「できないがしたがる」との回答が示された。この具体的な行動エピソードに関しては、後の面接内容で示す。

Figure73「食器洗い」の項目において、調査協力者 12 名の中で「ほとんど 1 人でできる」との回答は 1 件のみであり、「できないがしたがる」の回答は 8 件得られた。月齢は 30 ヶ月児～53 ヶ月児の間に表出されるとの結果が示された。これは、食器洗いをするにあたっては、食器を持ち、洗剤を付けたスポンジで洗い、流すといった多数の工程があり、まだ手も小さく充分に食器を持つこともできない子どもが行うには難しい行動ということが影響しているように考えられる。

また、Figure79「回覧板を回す」、Figure 81「新聞を取りに行く」、Figure 85「靴を洗う」、Figure「靴下を洗う」の項目において、得られた回答が 5 件のみであり全体の半分以下の結果であった。この「回覧板を回す」、「新聞を取りに行く」は、家の外を出て行う行動であり、「靴を洗う」、「靴下を洗う」などの行動に関しても普段の生活の中で頻繁に行う行動ではないように考えられる。しかし、L がこの 4 つの項目全てに回答しており、家庭内での経験数などの要因があるようにも考えられる。

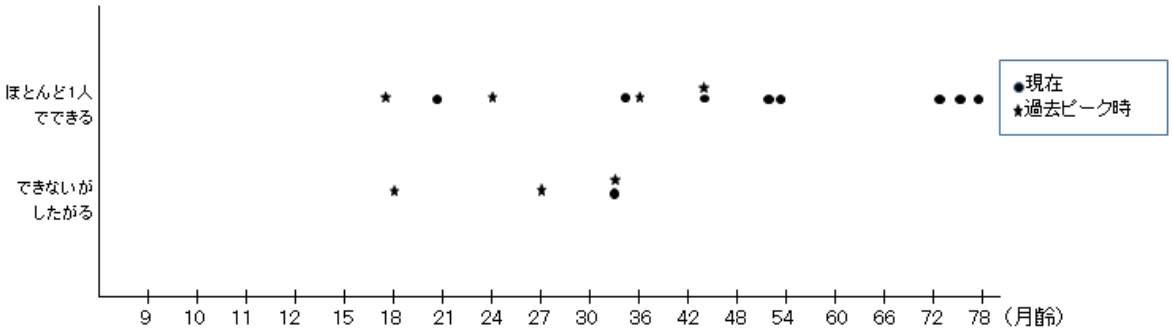
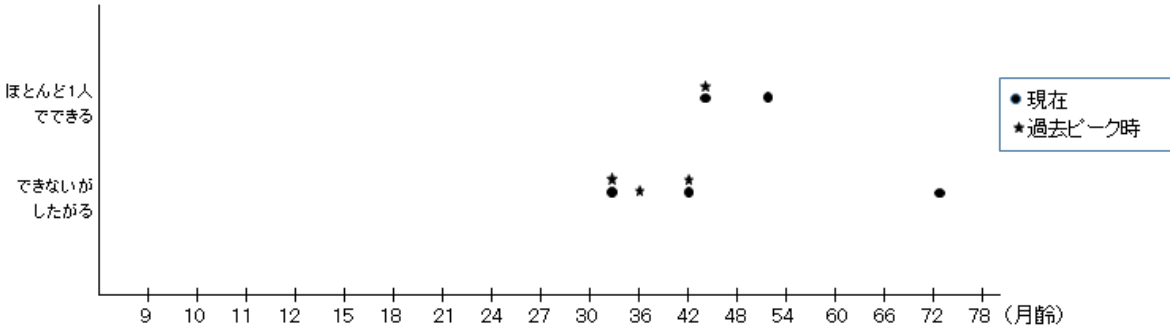


figure47 指示されたものを取りに行く



figur48 米とぎ

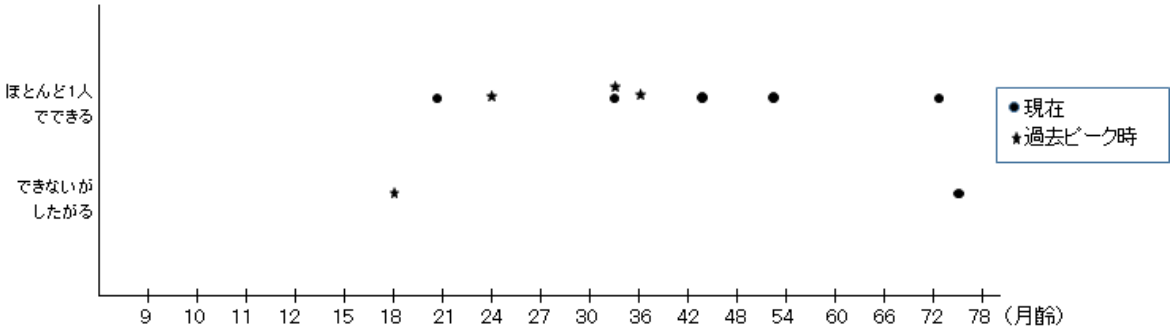


figure49 掃除機のコードを直す

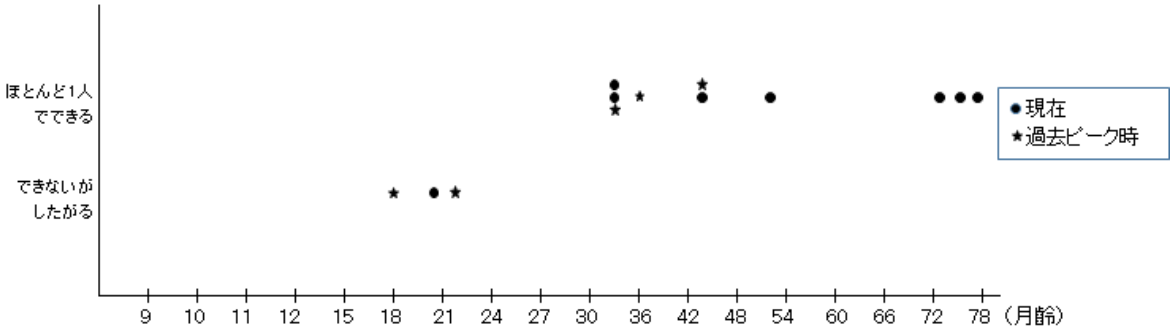


figure50 荷物を運ぶ(自分以外)

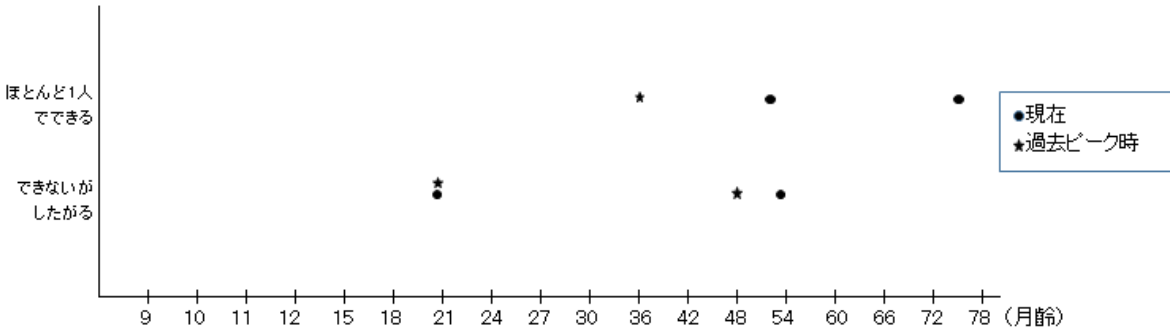


figure51 ゴミの日のゴミ捨て

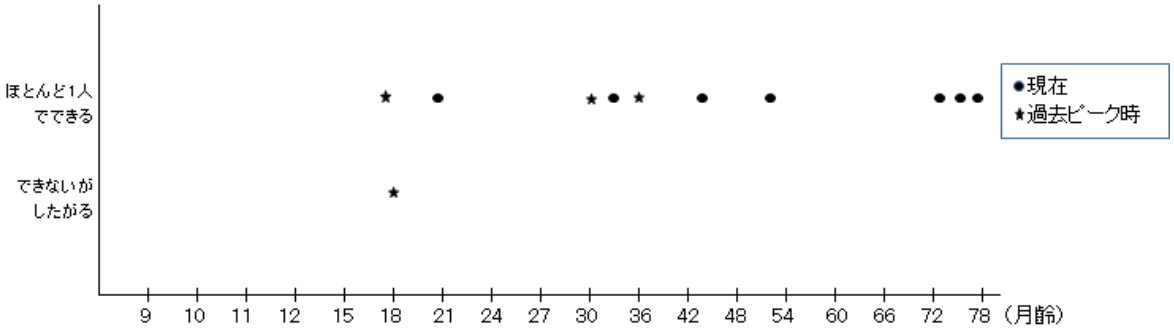


figure52 拭き掃除

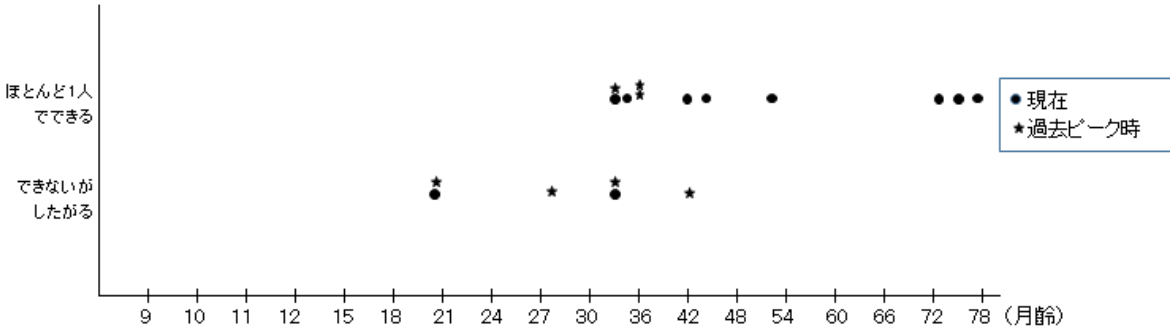


figure53 タオルを畳む

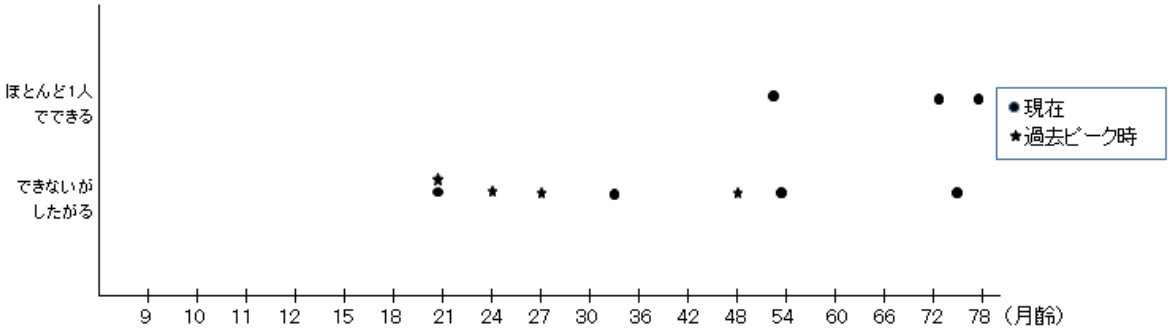


figure54 洗濯物を入れる

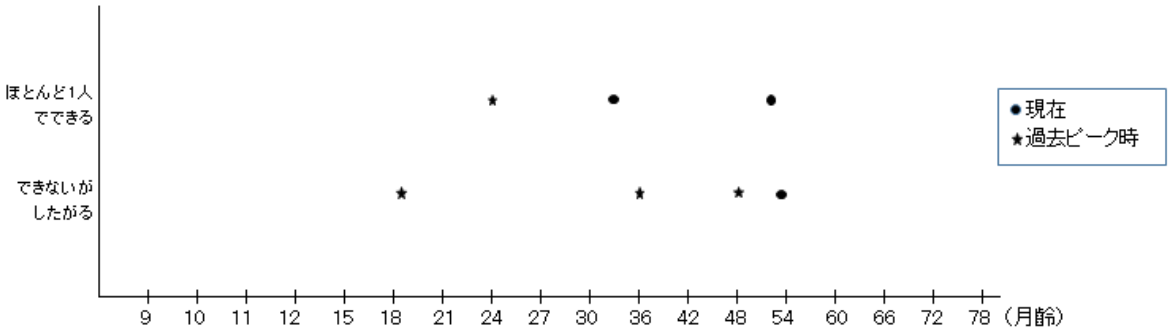


figure55 洗濯ボタン押す

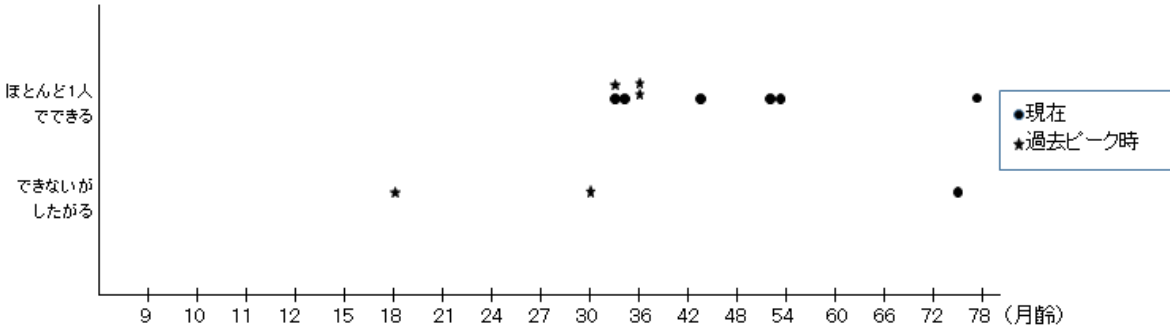


figure56 食器運び

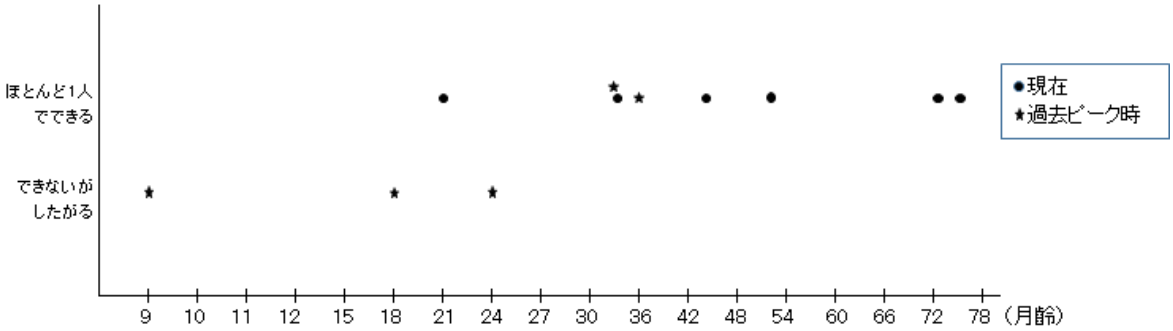


figure57 テーブルをふく

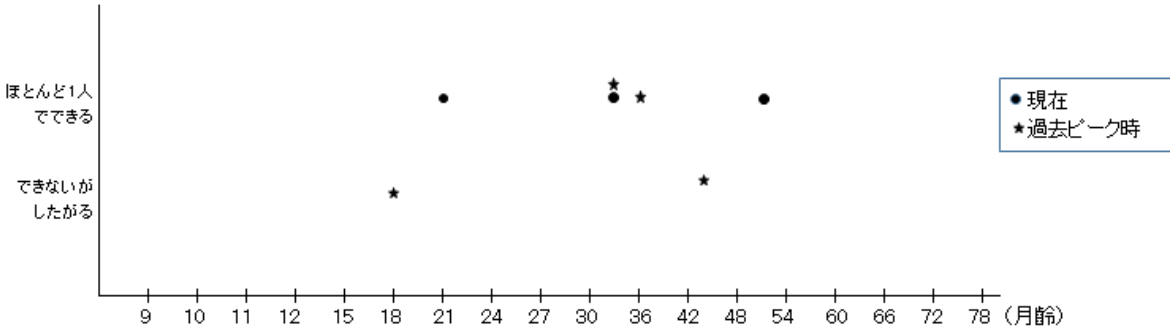


figure58 お皿を食器棚に片付ける(台に乗る)

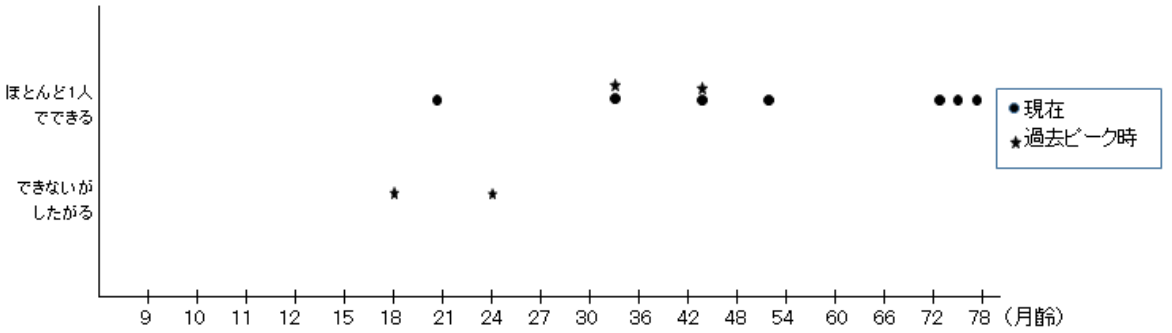


figure59 ハンガーを外す

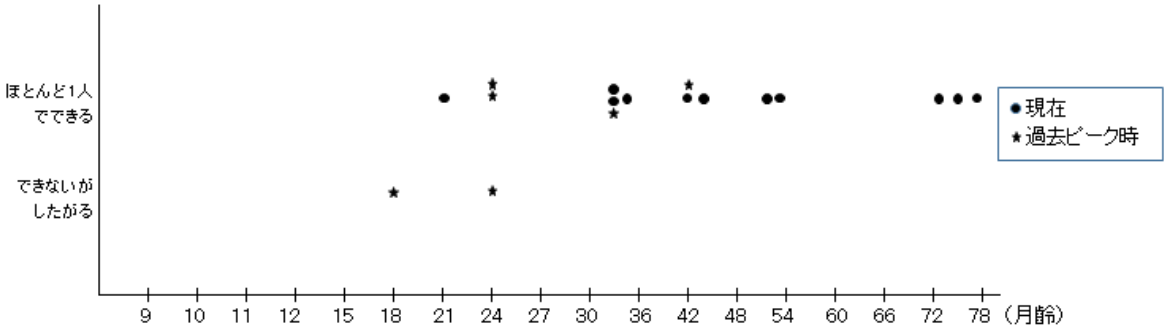


figure58 ゴミ箱にゴミを捨てる

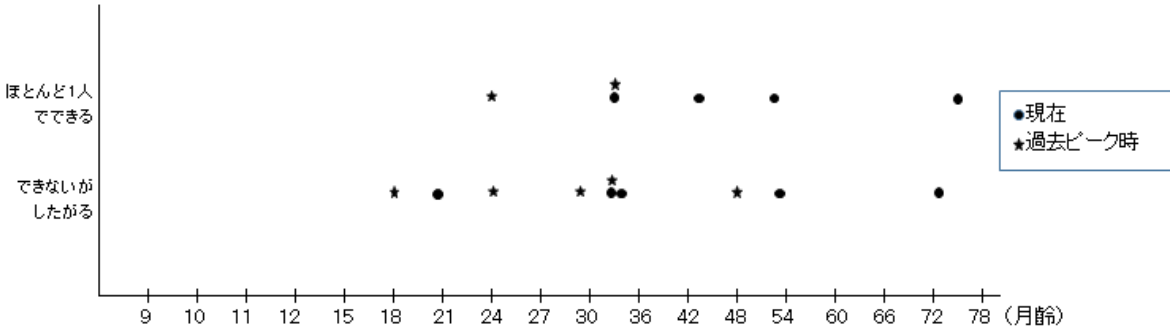


figure60 掃除機を使う

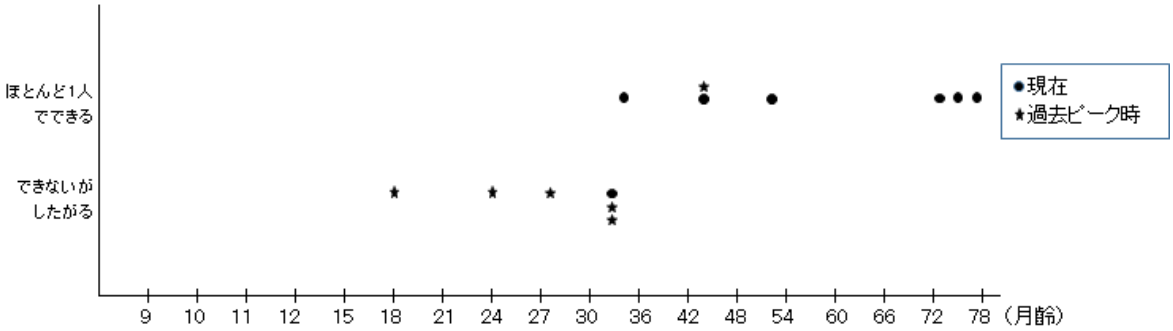


figure61 買い物の荷物持ち

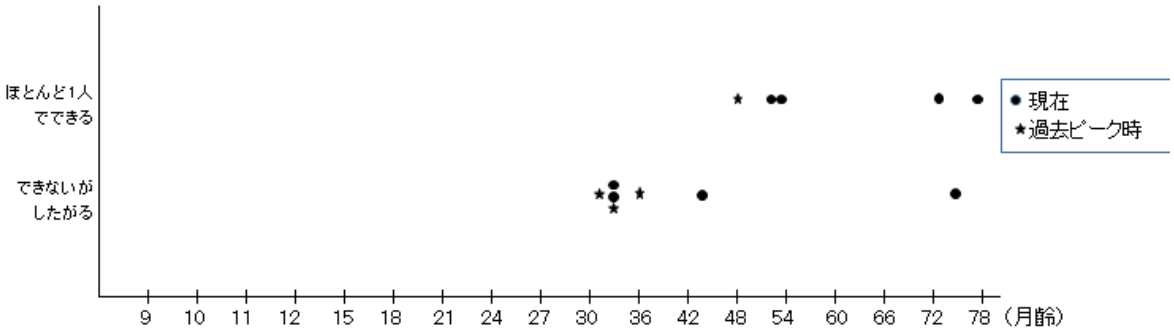


figure62 冷蔵庫からお茶をだし、注ぐ

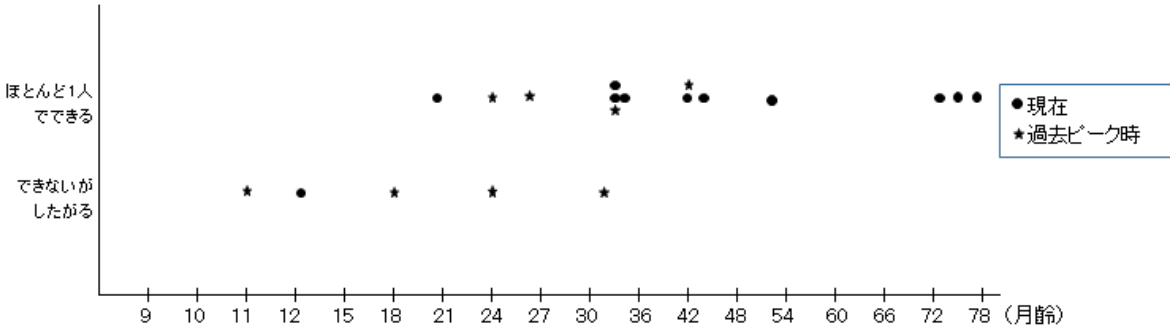


figure63 ドアの開け閉め

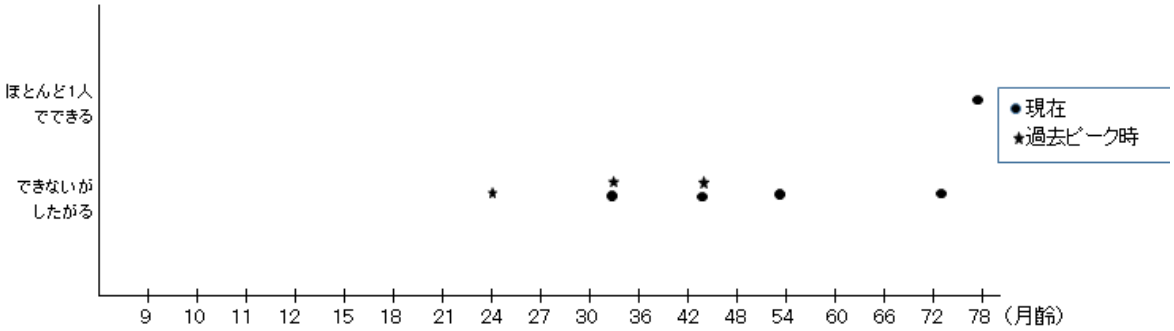


figure64 料理

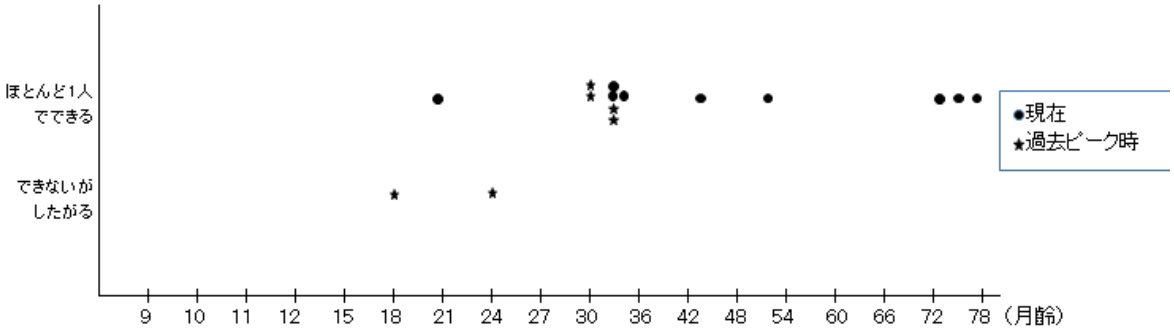


figure65 靴をそろえる

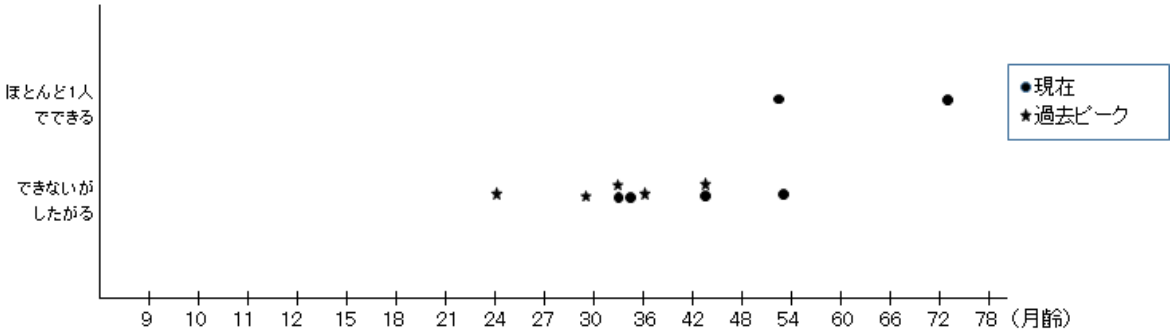


figure66 洗濯物を干す

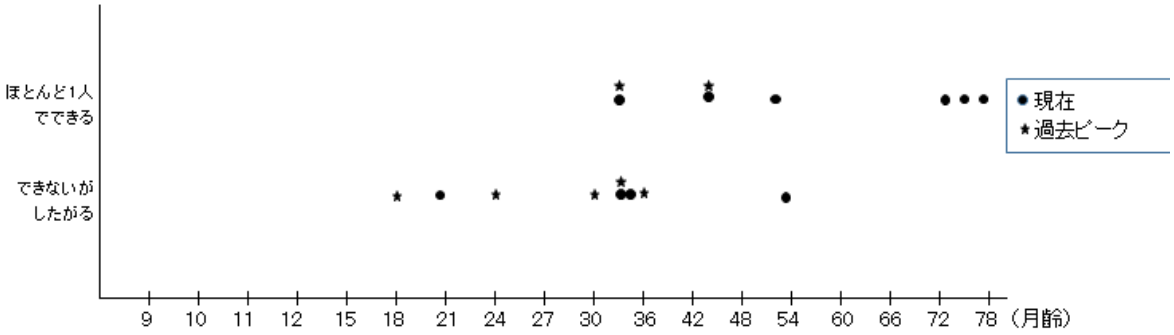


figure67 洗濯物を畳む

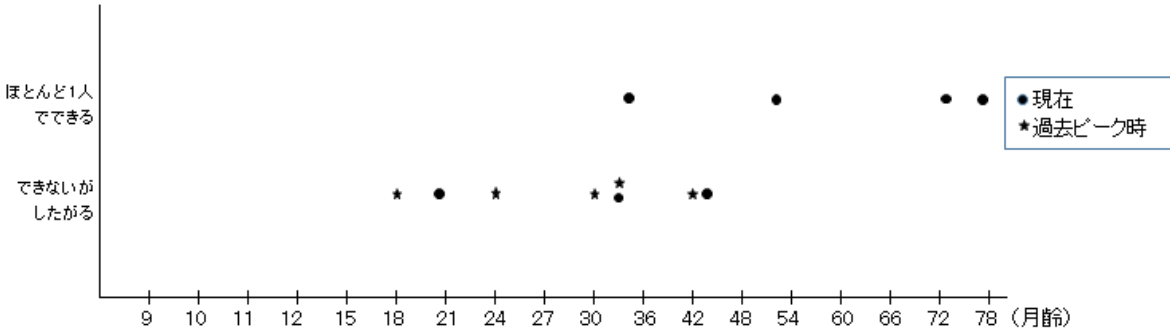


figure68 食事の用意

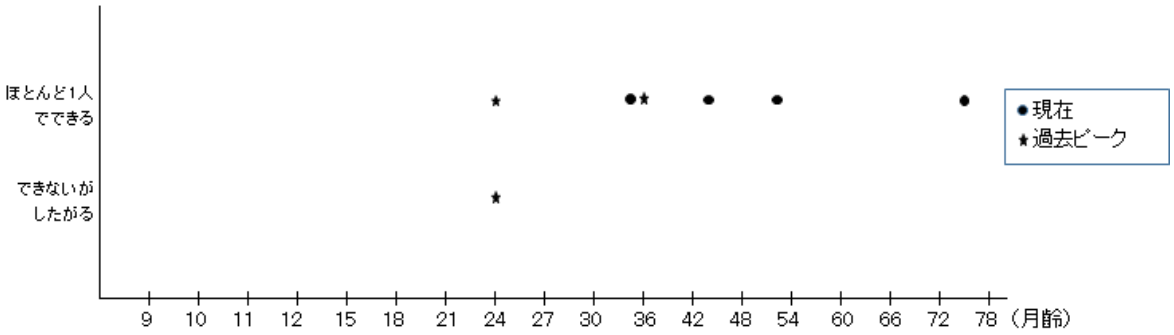


figure69 布団を畳む

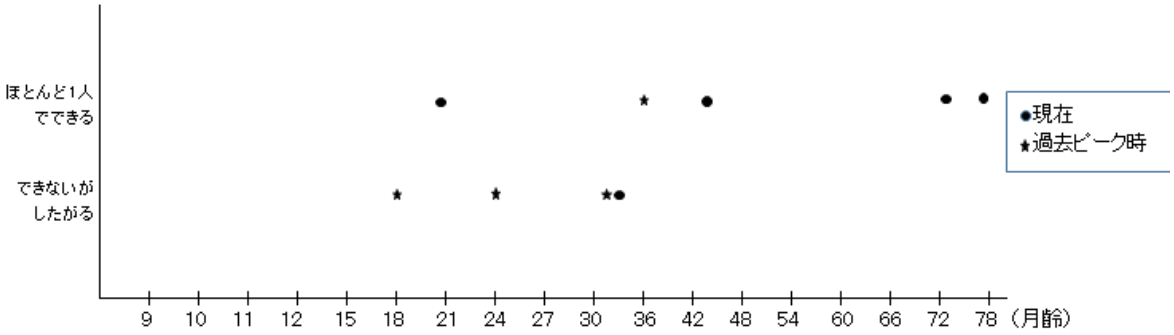


figure70 食後の後片付け

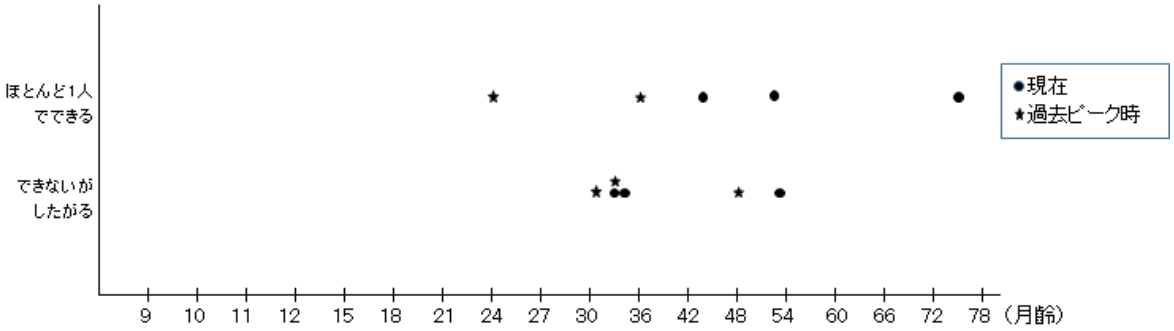


figure71 年下の兄弟の世話

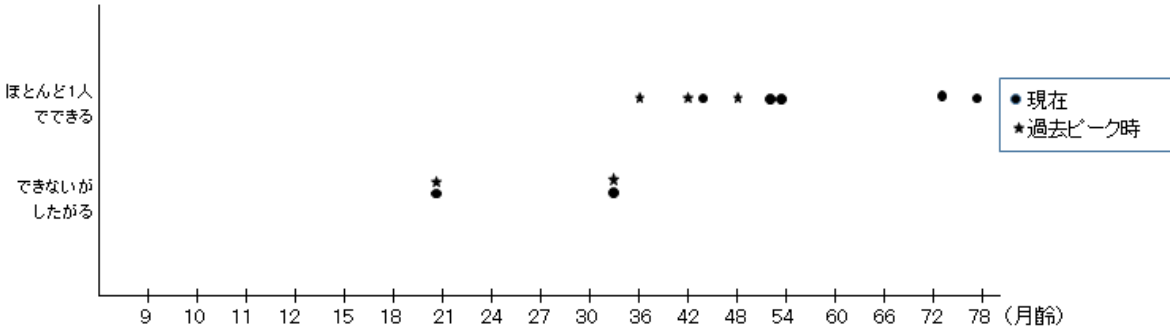


figure72 郵便物を取りに行く

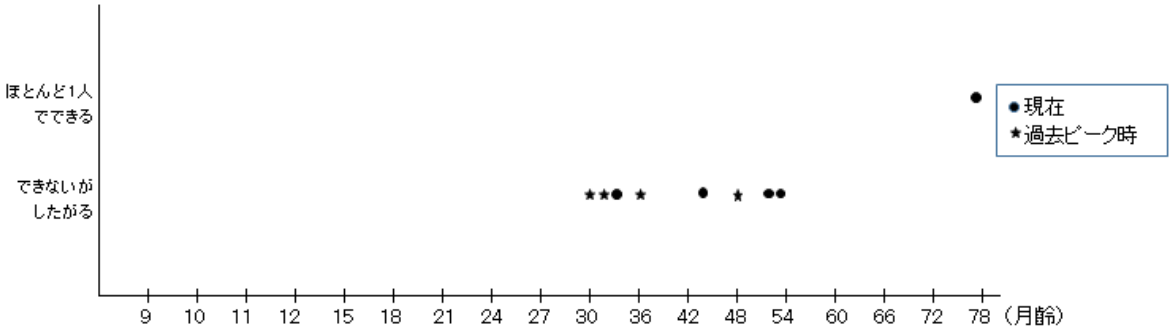


figure73 食器洗い

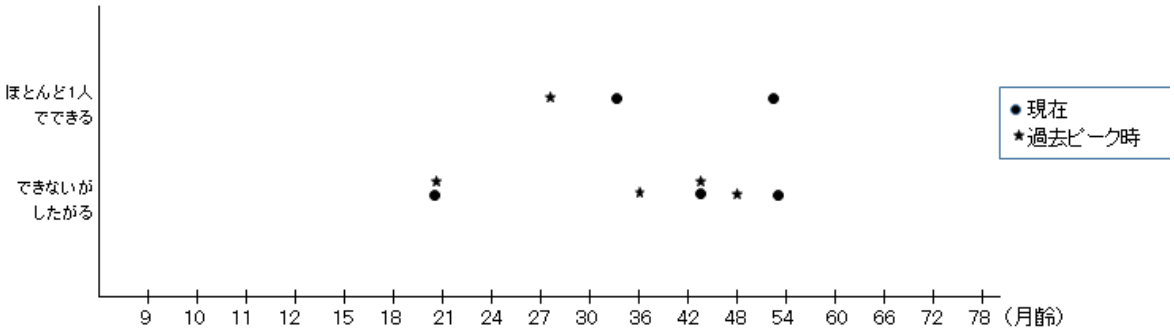


figure74 服をタンスにしまう

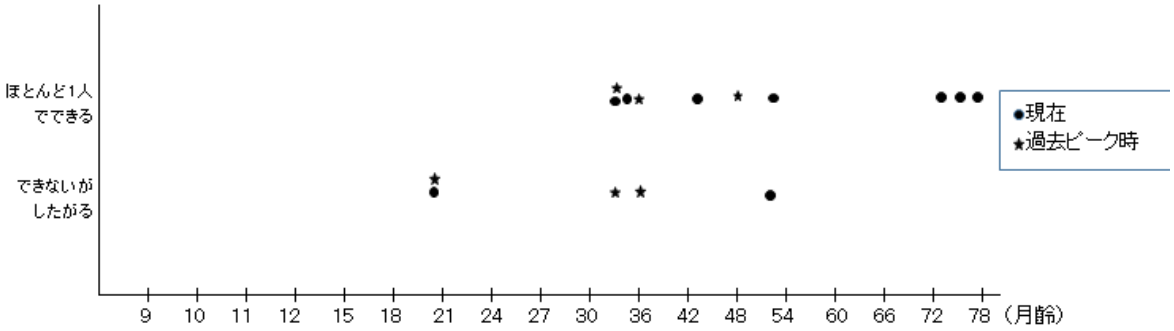


figure75 配膳

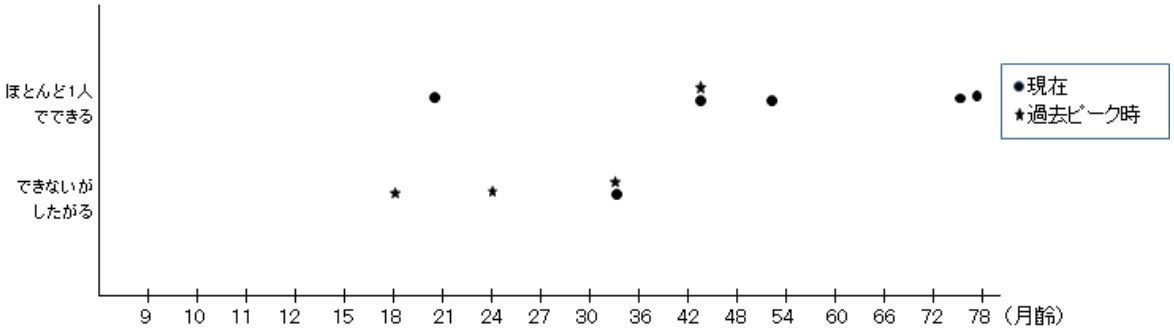


figure77 掃き掃除

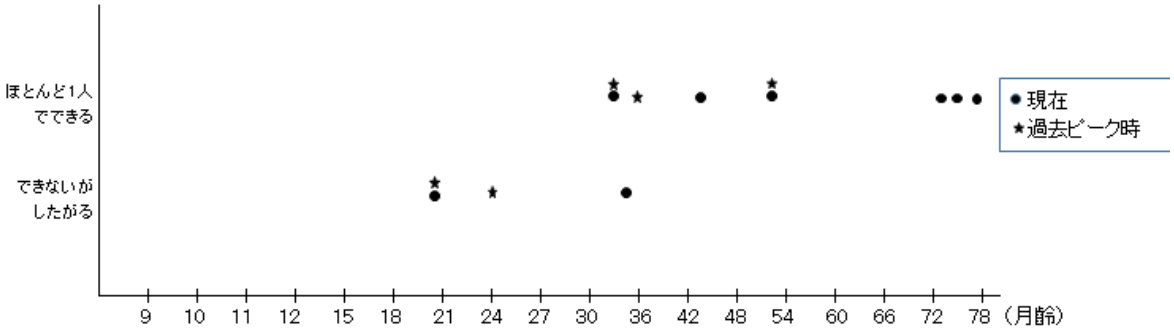


figure78 部屋の掃除

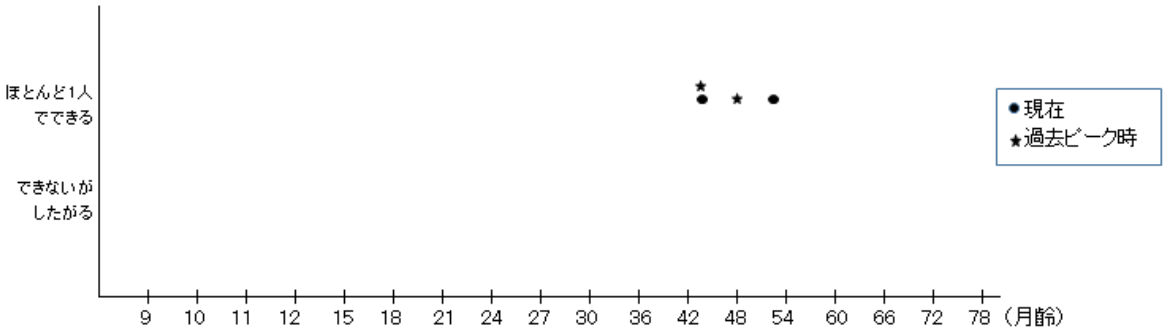


figure79 回覧板を回す

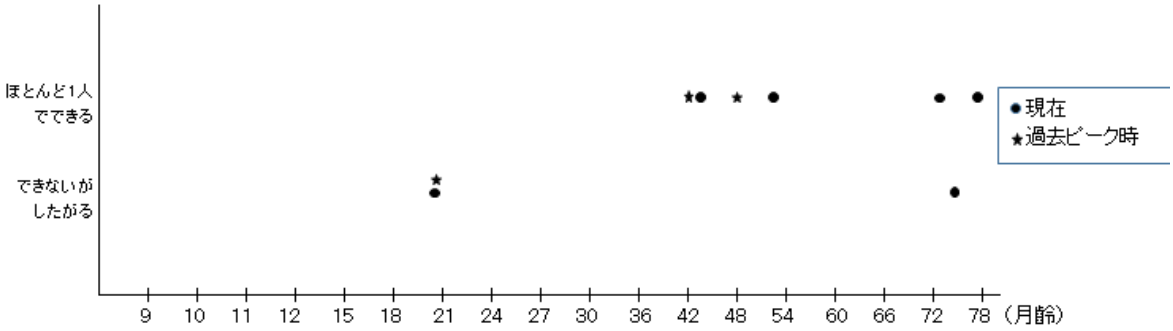


figure80 風呂掃除

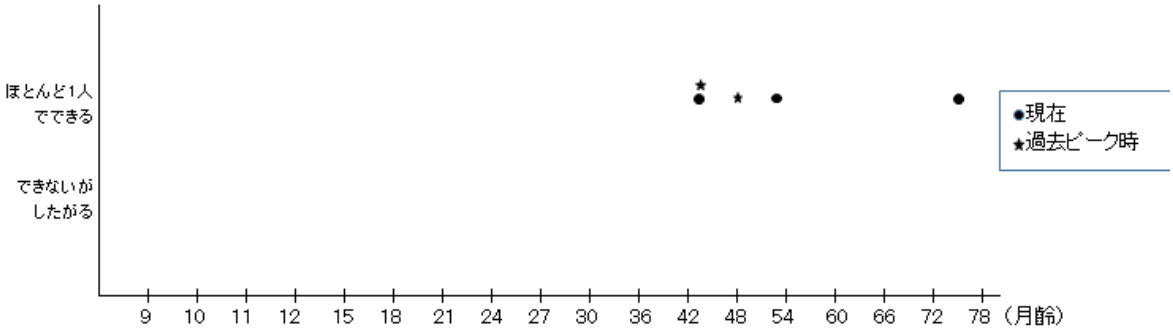


figure81 新聞を取りに行く

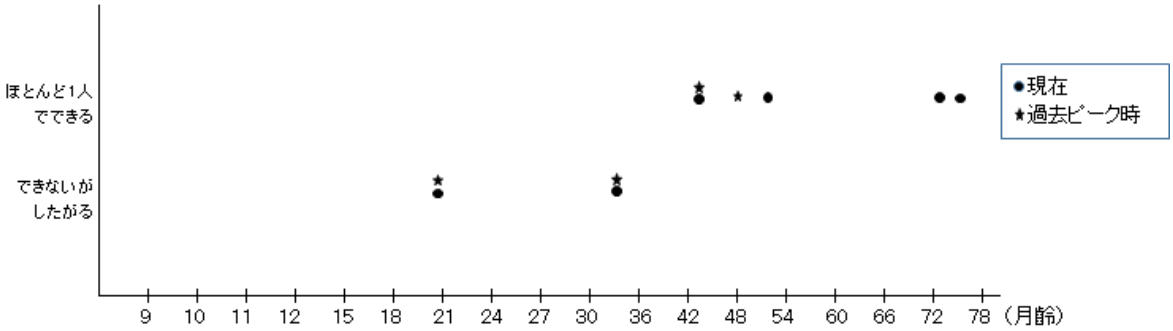


figure82 玄関掃除

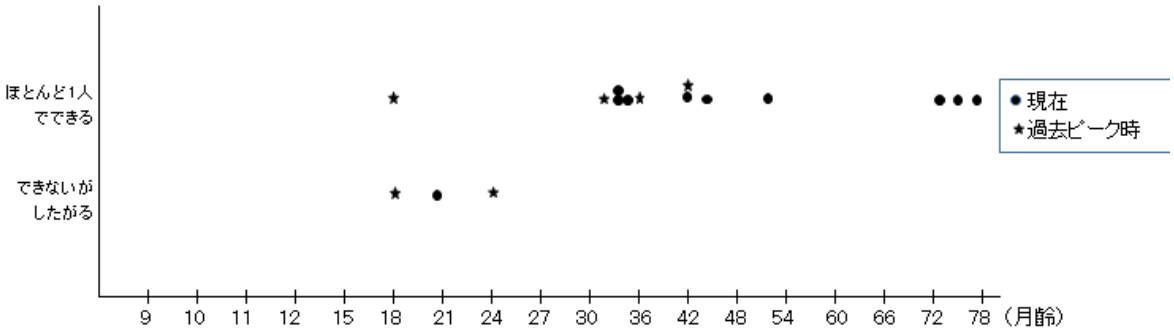


figure83 テレビを消す

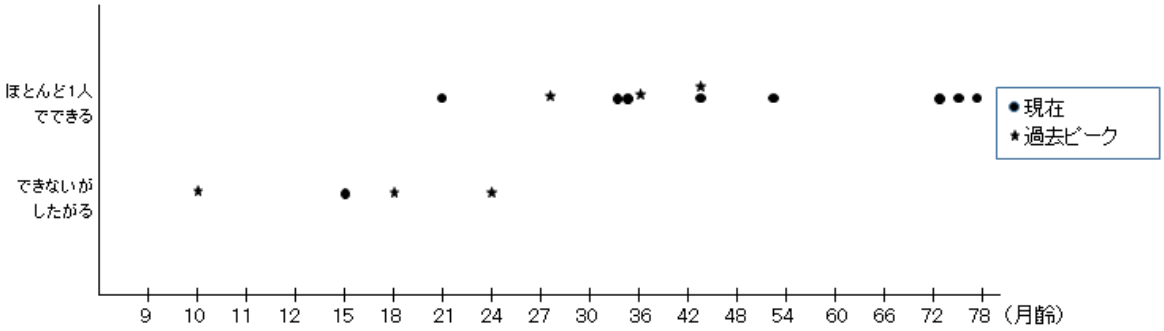


figure84 お風呂のスイッチを押す

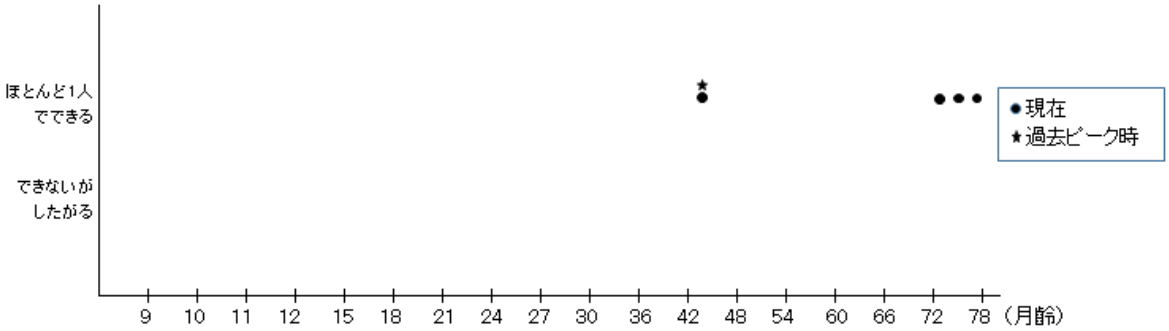


figure85 靴を洗う

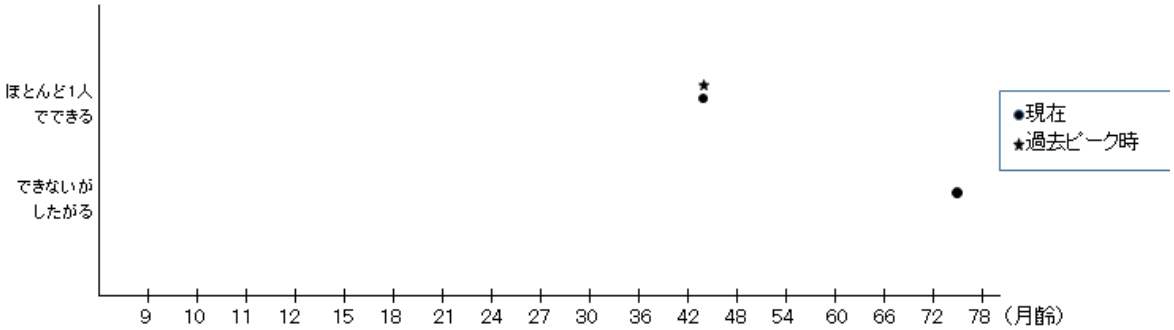


figure86 靴下を洗う

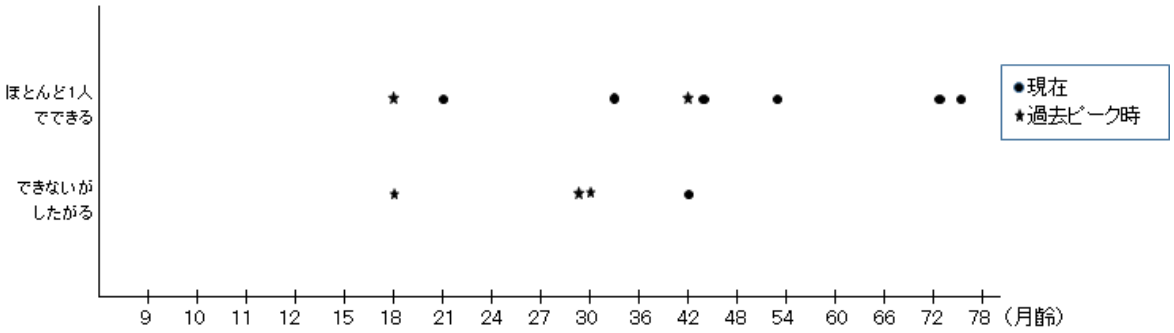


figure87 花の水やり

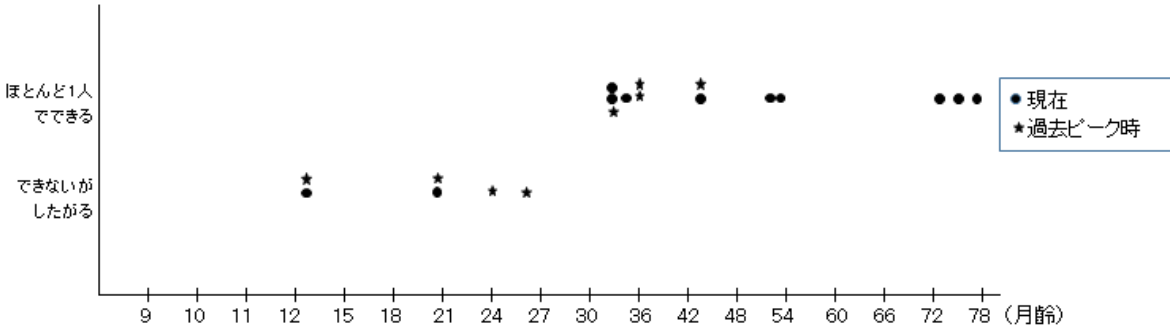


figure88 歯ブラシ取る

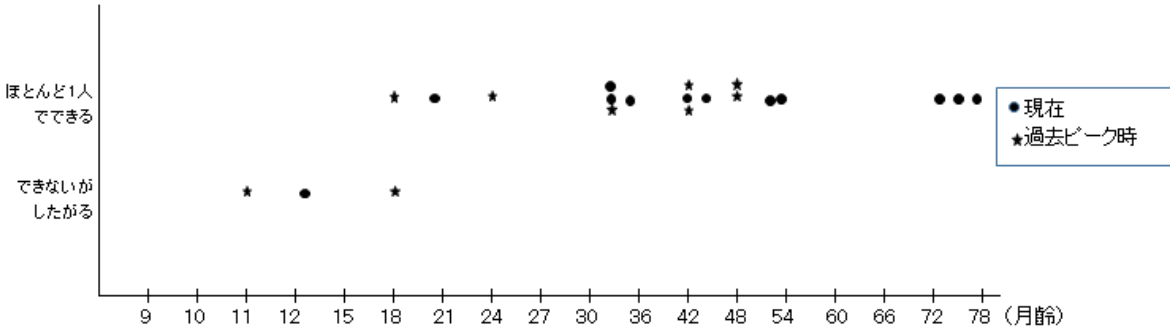


figure89 部屋の電気

3，3．日本語版「子どもの行動の調査－3～7歳児用（BSQ)」

各項目に対する評定値（6段階）の平均値を算出してカテゴリー得点とし、対象児のカテゴリー得点を BEHAVIORAL STYLE QUETIONNAIRE　PROFILE SHEET(Sean C. McDevitt, &William B. Carey,1975，1978：付録 1)で示されている標準値と比較することにより、各カテゴリーにおける程度の高低が算出され分類を行った。しかし、BEHAVIORAL STYLE QUESTIONNAIRE PROFILE SHEET(Sean C. McDevitt, &William B. Carey,1975，1978)は日本のデータを基準にしたものではなく、標準値の分類が少ない結果となった。

そこで、今回は基準とする標準値を日本のデータとして水野（1998）が示している値を使用して比較することにより、各カテゴリーにおける程度の高低を示した。対象児それぞれの平均値とカテゴリーごとに分類された気質特徴プロフィールを Table6 に示す。水野（1998）が示している BSQ の尺度得点の平均値については、それぞれ規則性（平均得点 3.56，SD＝0.80)、接近・退避（平均得点 3.25，SD=0.78)、順応性（平均得点 3.12，SD=0.67)、反応の強さ（平均得点 4.68，SD＝0.63)、固執性（平均得点 3.29，SD=0.69）であった。

Table6　日本語版「子どもの行動の調査（BSQ）」プロフィール

	規則性		接近・退避		順応性		反応の強さ		固執性	
対象児	平均値	分類	平均値	分類	平均値	分類	平均値	分類	平均値	分類
A	2.56	標準	3.55	標準	3.78	標準	3.50	弱い	3.60	標準
B	3.89	不規則	4.10	退避	3.83	慣れにくい	4.08	標準	3.00	標準
C	3.78	標準	4.30	退避	3.58	標準	5.73	強い	3.60	標準
D	4.11	不規則	3.64	標準	2.14	慣れやすい	3.89	弱い	2.13	固執的
E	3.44	標準	3.82	標準	3.64	標準	3.75	弱い	3.00	標準
F	3.56	標準	4.18	退避	3.92	慣れにくい	4.33	標準	3.60	標準
G	4.44	不規則	3.18	標準	3.50	標準	3.25	弱い	3.60	標準
H	4.67	不規則	3.09	標準	3.00	標準	5.08	標準	3.60	標準
I	4.44	不規則	3.18	標準	3.00	標準	5.09	標準	3.70	標準
J	3.44	標準	3.00	標準	2.75	標準	4.42	標準	3.40	標準
K	3.56	標準	4.00	標準	3.50	標準	3.92	弱い	2.60	標準
L	4.33	不規則	3.90	標準	3.58	標準	4.67	標準	2.20	固執的

3，4．面接内容について

①自立欲求の程度と BSQ の関連

保護者が感じる自立欲求の表出程度はどの程度なのか回答を求めた。各対象児についての結果を Table7 に示す。

Table7　自立欲求の程度

対象児	回答内容
A	2歳半ごろが多かった
B	今がピーク（現在：2歳9ヶ月）
C	今がピーク（現在：2歳9ヶ月）
D	言葉ではないが「したがる」欲求はよく感じる
E	2歳ごろが多かった
F	兄弟3人とも多いが、その中でも(52ヶ月児が）特に多いように感じる
G	あまり言わない
H	覚えていない
I	覚えていないが、あまり言わなかったようにも思う。
J	多い
K	今がピーク（現在：1歳8カ月）
L	多い

次に、BSQ と自立欲求の程度に関して、Table6 の気質特徴を基に検討していく。気質特徴と自立欲求行動との関連での仮説 1 として、規則性カテゴリーにおける規則的な子どもの保護者は、子どもの自立欲求行動は様々な項目で多く表出されるのではないかとの仮説を立てた。標準的な規則性であると分類される A、C、E、F、J、K において、Table7 の保護者が感じる自立欲求の程度は「多い」「今がピーク」など自立欲求行動が多く表出されていることを示している。「あまり言わない」「覚えていない」と回答している G、H、I は不規則と分類されており、特に G の保護者は面接の中で「日によってイヤイヤという頻度が違ったため予想がしにくく、困る」と語られていた。こういった不規則な子どもの保護者は、自立欲求行動表出の予測を事前に立てることができず、急な子どもの欲求に対応しきれない場面も多い事が考えられた。

更に、仮説 2 として、接近性カテゴリーにおける接近的な子どもは、保護者がしていることやきょうだいの行っていることなどに対して積極的に近づき、やってみようとする特徴があるため、自立欲求行動は様々な項目で多く表出されるのではないかとの仮説を立てた。しかし、標準と分類されている子どもの保護者が感じる自立欲求の程度は「多い」との回答も多いが「あまり言わない」との回答もあり、同時に退避と分類される B、C、F の子どもの自立欲求の程度は少ないとの仮説を立てたが「多い」「今がピーク」との回答であった。真似という行動に対しても、B、C、E、F、H、J、K、L の保護者が真似をすると語っており仮説は検証されなかった。

仮説 3 として、順応性カテゴリーにおける慣れにくい子どもは、日常生活場面の行動においても慣れにくく、保護者が促さなければ行わない、保護者が行ったほうが早いと先に行動してしまうという場面が多いのではないかと考え自立欲求行動は少ないのではないかとの仮説を立てた。しかし、慣れにくいと分類された B において、保護者が感じる自立欲求の程度（Table7）は「多い」「今がピーク」など自立欲求行動が多く表出されていると示されており、仮説は検証されたとはいえないだろう。しかし慣れにくいと分類された G においては、「あまり言わない」と述べられており、面接内容においても「怖がりですぐに諦めてしまう」「Mo が励ましたり促したりしなければ行動しない」と語られ、G は行動や環境の変化に慣れることが苦手なためにしようとする行動を諦めてしまいやすいのではないだろうか。その結果として、自立欲求行動もあまり見られないように考えられているのではないか。

仮説 4 として、反応性の強さカテゴリーにおける反応が強い子どもは、自立欲求行動は多いのではないかと仮説を立てた。反応性が強いと分類された C は「今がピーク」と回答しており、自立欲求行動が多いと考えられるため、仮説は検証されたと考えられる。これは、反応が強い子どもは、自立欲求表出時の「○○がする」などといった行動や、それを保護者が拒否した際の泣きなどの反応が強いことが考えられる。そうした欲求拒否時の反応の強さを経験した保護者は、子どもの言う通りに自立欲求行動をさせるようになり、自立欲求行動

が多い結果となっている可能性が考えられる。

仮説 5 として、固執性カテゴリーにおける固執的な子どもは、自立欲求行動を行う際に、できていないことや難しいことであっても諦めずに集中し、何時間もその行動をし続けるのではないかと考え、時間に制限のある保護者は、欲求を受け入れにくいことが考えられる。そのため、保護者が感じる自立欲求の強さは高いのではないかと仮説を立てた。固執的と分類された D、L は、「言葉ではないがしたがる欲求はよく感じる」「多い」と述べており、保護者の感じる自立欲求の程度は多いことが伺えた。しかし、D の月齢は 13 ヶ月であり、今回は実態調査ということもあり回答の協力を得られたが 3 歳から 7 歳児用である BSQ の結果と検討するには妥当でないことも考えられるため注意が必要である。L の保護者に最長での待ち時間を尋ねたところ、「靴下を履くことに 10～15 分待った」と述べており、日常の生活の中での 15 分は長いように思われる。この 15 分間靴下を履き続けるという行動は、BSQ の結果としてでた固執性とも関連しているように考えられる。こういった子どもの行動を待つということに関して、L の保護者は「手を出してしまわないように見ないようにしている」と対応方法を考えられており、こういった子ども主体として考えられる保護者の行動が子どもの自立欲求行動の発達を促す可能性も考えられた。

加えて、Table7 の自立欲求の程度において G と I が自立欲求を「あまり言わない」と述べている。このそれぞれの気質特徴について、G は不規則であり、新規場面など新しいものに慣れにくく、その反応が弱く、活動に対して固執的でない特徴がある。I は不規則あり、固執的ではないという特徴以外はすべて標準的という結果となっている。規則性カテゴリーにおける不規則の分類は 12 件中 11 件の対象児が当てはまっているため検討がむずかしいため、固執性に関して検討を行う。G は「何に関してもすぐに諦めてしまう」と述べており、固執的でない子どもは自立欲求行動に関してもすぐに無理だと諦めてしまうため、自立欲求行動が見られないのではないか。また、I と H の気質特徴はまったく同じ分類に属しており、I と H の保護者は面接中「覚えていない」という回答も多かった。保護者が回答している子どもの気質特徴ということを考慮すると、保護者側の要因は自立欲求行動の表出とも大きい関連があるように思われるため、今後の検討課題として検討していく必要があるだろう。

②-1. 自立欲求行動の具体的な内容

自立欲求行動として2つに分類した生活場面における自分で自分のことをしたがるという主に身辺自立についての欲求と、家庭での手伝いなどを欲する手伝い欲求の具体的な行動内容に関して、調査協力者から得られた内容をTable8.9に示す。3, 1. 身辺自立欲求行動の欲求表出月齢の部分でも論じたが、Figure11「食後の後片付け（流しまで運ぶ)」という項目に関して、歩行が完全でない11ヶ月の子どもが欲求行動を表出すると回答された。この具体的な内容としては、流しまで自分用の小さい皿等を歩いて持って行き、流し台に落とすように入れるようである。そのため、残ったものがこぼれる、水がはじけて周りが水浸しになるなどの現状もあり保護者としては困っているとの回答が得られた。また、3, 2. 手伝い欲求行動の欲求表出月齢の部分でも論じたが、Figure57「テーブルをふく」の項目において、9ヶ月児が「できないがしたがる」という回答が得られた。この具体的な内容として、母親が拭いている布巾を取り上げて、それを振りまわすようにしていると述べられており、実際に拭けていないものの、拭く真似をしているようだとの回答が得られた。

Table8 身辺自立欲求行動の面接内容

質問項目	全回答数	具体的な内容	回答数
1 自分の食事に調味料をかける	4	ふりかけ	2
		かけすぎ防止のため小皿に入れさせる	1
2 魚の身をほぐす	4	箸を使用	4
		つつく	4
		口に入れて出す	2
4 食事（はしを使う）	1	補助箸を嫌がる	1
6 お菓子の開封	3	指先でちぎる	3
7 冷蔵庫から物を出す	8	そのためにだっこを求める	1
		椅子を使用する	6
11 食後の後片付け（流しまで運ぶ）	1	流しに持っていく	1
15 衣服の着脱	4	ボタンをとめる	4
		チャックをあげる	1
17 靴を履く	3	マジックテープをとめる	3
20 自分のおむつ交換	1	ぬぐ	1
		拭く	1
21 排泄	3	おまるに座る	1
22 歯磨き	8	口に入れるのみ	5
		仕上げ磨きは嫌がらない	5
		仕上げ磨きは嫌がる	1
34 台に上り高いところのものを取る	2	クッションなどに上る	2
		手を伸ばす	2
41 自転車に乗る	1	自分でよじ登る	1
45 傘をさす	4	傘をもつ	4
		2歳ごろにしたがることが多い	2

Table9　手伝い欲求行動の面接内容

質問項目	全回答数	具体的な内容	回答数
2　米とぎ	4	台にのる	3
		とぎ汁を回すのみ	4
11　テーブルをふく	1	Moが拭いている布巾をとる	1
		持ち、手をゆらすのみ	1
15　掃除機を使う	9	スイッチ入	5
		スイッチ切（真似）	2
		コードを片付ける	2
18　ドアの開け閉め	2	引き戸	1
		そのためにだっこを求める	1
19　料理	5	切る（包丁）	3
		炒める	1
		卵を割る	3
		混ぜる	2
23　食事の用意	1	皿を運ぶ	1
26　年下の兄弟の世話	3	着替え	1
		おむつ交換	1
		あやす	1
		上の兄弟の手伝い	1
37　テレビを消す	2	リモコン使用	2
		チャンネルも変える	2
43　部屋の電気	4	そのためにだっこを求める	3
		テーブルに乗る	1
		座布団に乗る	1

②-2.　キッチン用の台設置の実態

Table8「身辺自立欲求行動の面接内容」における 7.冷蔵庫から物を出すの項目において、「椅子を出す」との回答が得られ、予め手伝い用のイスをキッチンに用意しているとの回答があった。このように、キッチン用の台や椅子を設置している実態を Table10. Figure90 に示す。Figure90 上の「保護者」とは、保護者が子どもの手伝い用にと予め用意している場合であり、「子ども」とは、子どもが自らリビングなどにある椅子を持っていく場合を示している。この結果から、半数の家庭で子ども自ら椅子を用意していることが示され、「ジブンデ」という自立欲求行動の強さを感じる結果となったように考える。

Table10 キッチン用の台設置の実態

回答内容	回答数
保護者が子ども用に用意している	3
子どもが自ら椅子を持って行く	6
台なし	3

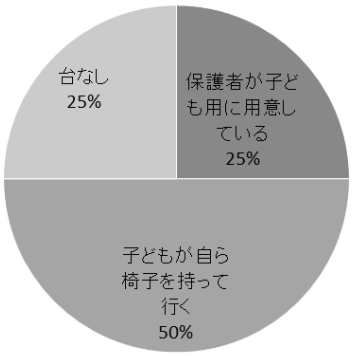


Figure90 キッチン用の台設置の実態

③自立欲求行動表出時の感情

自立欲求表出時の保護者の感情について、具体的な内容を Table11 に示す。また、保護者の自立欲求行動表出時における面接時初発言語に関して感情内容をポジティブなもの、ネガティブなものに分類し、割合を Table12. Figure91 に示した。その結果、ネガティブな内容から発言する保護者が多いことが示された。これは、自立欲求行動を第一次反抗期と考えてる保護者が多いこともあり、面倒くさいもの、困るものと感じることが多いことが考えられる。

Table11　自立欲求行動表出時の感情

内容		回答数
ポジティブ	成長	5
	これからできることが増えていく	1
	いいことだ	1
	させてあげたい	6
	うれしい	4
ネガティブ	イヤイヤ期が来たと構えた	2
	イライラした	3
	面倒くさい	4
	さみしい	1
	汚れるから困る	1

Table12　自立欲求行動表出時の感情

回答内容	回答数
ポジティブ	4
ネガティブ	7
覚えていない	1

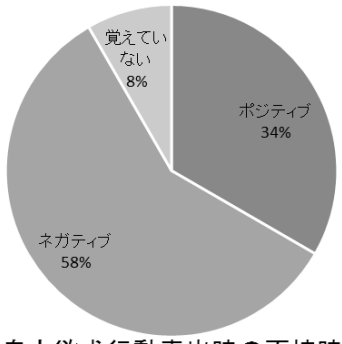


Figure91 自立欲求行動表出時の面接時初発言語

④-1. 自立欲求行動表出時の対応方法

自立欲求行動が表出された際の対応方法に関して、得られた内容を Table13 に示す。Table13 上における、仕上げとは子どもが自立欲求行動を終了した後に、保護者がその行動を補う行動のことであり、フォローとは自立欲求行動を行っている最中に保護者が子どもを手伝う行動を示している。対応方法の中で、仕上げをする際はどのように子どもと関わるのか、子どもができていない際のフォローの方法に関しても回答が得られたためここに示す。また、Table13 上には示していないが、「イライラしてしまう時は一度子どもと距離を置く。」と語った保護者がおり、子どもの自立欲求のみに限らず、子どもとよりよい関係を築くための工夫も示された。

Table13 対応方法

	内容	回答数
	納得するまでさせる	8
	ルールを決めさせる	2
	見本を見せてからさせる	1
	一緒に行う	5
	褒めながら見守る	2
	子どもにまかせてほっておく	2
	なぜしたいのかを聞き、一緒に考える	1
	事前に注意点を伝える	3
仕上げ	声をかけて行う	3
	子どもが気づかないように行う	4
フォロー	Moの判断で行う	1
	子どもから援助要請があった時	2

仕上げ: 自立欲求行動を終了した後に保護者がその行動を補う行動
フォロー: 自立欲求行動の最中に保護者が手伝う行動

④-2. 自立欲求行動表出時の最長での待ち時間

対応方法の回答において「納得するまでさせる」、「見守る」との回答が得られ、子どもが行動を行う際、保護者はどの程度まで待つことができるのか最長の待ち時間を尋ねた。その結果を Figure92 に示す。5 分、10 分、15 分との回答はいずれも 2 件であった。これは、日常生活において子どもの 1 つの行動のためにとれる時間のようにも考えられた。しかし、1 時間と回答した保護者は子どもが満足に行動を表出でき、保護者が安心して見守る環境を作るために 1 時間という時間をとるようにしていると回答していた。このように保護者が配慮し、子どもの時間として自立欲求行動を容認することは親子相互によい体験となっていくのではないだろうか。

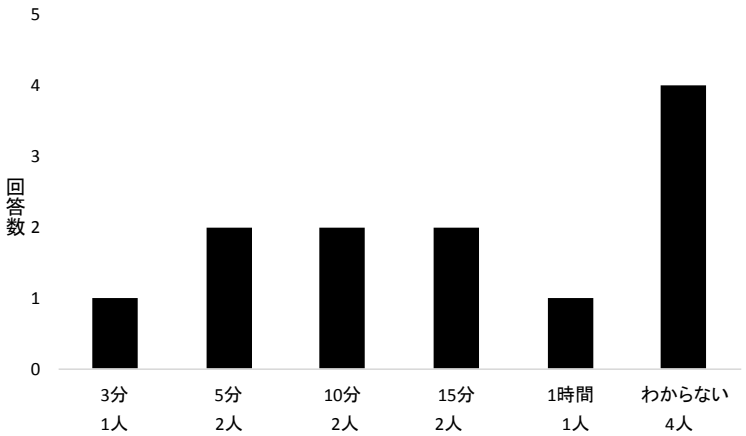


Figure92 最長待ち時間

④-3. 自立欲求行動ができなかった時の対応方法

子どもが自立欲求行動を表出させた際、発達がまだ未熟なために達成できない内容も多くあると考えられる。そこで、表出行動ができなかった時の保護者の対応方法に関して得られた回答を Table14 に示す。「声をかける」の具体的な内容としては、「やっていい」「手伝っていい」「Mo も一緒にしたいな」という内容が語られた。基本的には保護者が子どもより下手に出てお願いする形で伝えると手伝わせてくれるとの語りがあり、子どもの主体性を大切にした対応であれば子どもも手伝い要求に応じることも考えられた。また「援助要請があれば手伝う」の回答については、子どもからの「やって」、「できない」との言葉を待つとの回答であった。

Table14 できなかった時の対応方法

内容	回答数
見守る	2
声をかける	3
援助要請があれば手伝う	7
アドバイスを行う	4
手添え	5
励ます	1

④-4. 子どもには難しいと思われる行動についての対応方法

子どもが自立欲求を表出した際に、子どもの発達的に考えてまだ難しいと思われる行動内容もあるように考えられる。そこで、保護者が子どもには難しいと感じた際にどのように対応しているのかに関して得られた回答を Table15 に示す。妥協案を示すの具体的な内容としては、「今は小さいからもう少し大きくなったらできるよ」と伝えるとの回答が得られ、見通しをつけることで納得しやすくする保護者の工夫の重要性についても考えられた。

Table15 難しい行動についての対応方法

内容	回答数
妥協案を示す	2
一度やらせてみる	8
まだ難しいと伝える	1
一緒に行う	1

④-5. 子どもが求める自立欲求行動への妥協案

④-4 で述べたような、保護者が子どもには難しいと感じた際の妥協案として提示する別の行動内容の具体例を Table16 に示す。

Table16 妥協案について

行動例	妥協案
包丁を使う	にんじんの型抜き，野菜を洗う，混ぜる
服を畳む	ハンカチを畳む
掃除機	小さいほうき
醤油を入れる	計量スプーンを持ってもらう
餃子を包む	子ども専用の場所と道具を用意して少量のみさせる

⑤きょうだい関係との関連

子どもの自立欲求行動に関して、きょうだいがいることでの保護者の気づきについて、得られた内容を Table17 に示す。きょうだいの真似をするとの回答は多く、6 件のうち全ての回答者が上のきょうだいの真似をすると回答をしており、特に上のきょうだいがいる子どもの影響は大きいように考えられた。

Table17 きょうだいの関連

内容	回答数
真似をする	6
競争している	2
上のきょうだいよりも発達が早いように感じる	2
兄と同じ月齢で同じものに興味を持っている	1
「ジブンデ」ということが上のきょうだいと比べて一番強い	2
下の子どもが生まれてから、自分でが増えた気がする。 「Moが喜んでくれるから」という思いが大きいのかもしれない。 終わった後、「ボクカシコイ？」「スゴイ？」などと聞いてくる。	1

⑥自立欲求行動を容認するかどうかの判断基準

子どもが自立欲求を表出した際、させるかさせないかの保護者の判断基準について得られた内容を Table18 に示す。全ての調査協力者が、「危険なことはさせない」と回答した結果となった。また、「親の都合でさせないことがある」の回答の具体的な内容としては、「どうしても汚せない服を着ている時はさせてあげられない」、「親の余裕のない時は難しい」との回答が得られ、保護者の容認しにくい要因として子どもの気質や保護者の都合に加えて、外的な要因も含まれることが考えられた。

Table18 判断基準

内容	回答数
危険なことはさせない	12
危険なこと以外は極力させてあげたい	5
他人に迷惑がかからないことはさせない	2
親側の都合でさせないことがある	2

4，総合考察

本論文では、自立欲求行動の具体的な行動内容を明らかにすることを目的 1 としていた。「結果と考察」の②-1、②-2 でも論じたように身辺自立欲求行動、手伝い欲求行動の 2 つにおいて具体的な行動内容が明らかとなった。

その中でも、子どもが料理や米とぎ、食器洗いなどをしたがった時に保護者が応じれるよう、キッチンに予め台や椅子を用意しているという保護者側の工夫を知ることができ、これは子どものしたがる気持ちである自立欲求行動を容認しようとする保護者側の思いや対応を検討するために重要な情報であると考える。また、調査協力者の半数の子どもが自分で椅子を持って行くという内容を調査で得ることができた。これは、自分でしたい、手伝いたいといった自立欲求の強さと関連があるように考えられる。

加えて、本論文では子どもの自立欲求行動を保護者が承認しにくい要因として保護者の養育背景や､子どもの気質を明らかにすることを目的 2 としていた。自立欲求行動表出時の感情を尋ねた際の保護者の面接時初発言語を示した Figure91 の結果、ネガティブな内容から発言する保護者が多い結果となり、その面接内容からも「イライラした」や「面倒くさい」などの意見が多かった。このことから、自立欲求行動は保護者にとってネガティブなものとして受け止められる可能性が高いと考えられる。しかし面接を続けるうちに、ポジティブな内容として「成長」､「させてあげたい」といった意見も半数近く得られ、子どもの気持ちや「ジブンデ」という主張、積極性を大切にしたいと考えられている保護者も多いことが今回の面接調査で示された。高橋（2000）が「○○がする」という行動は子どものやりたい気持ちの自己主張と、保護者の世話を焼こうという気持ちの衝突が生じるために「反抗期」という名で呼ばれると主張しているように、保護者は子どもの自立欲求行動を子どもの成長の 1 つと考えることはできるが、保護者の思いと衝突するという側面が今回の結果に表れていると考えられる。

日常生活において、子どもがしたがる場面は食事場面や、外出する際などに多い衣服の着脱などと、保護者にとって時間的余裕がないときに表出されることが多いと考えられる。このような時間的制約、余裕のなさということが保護者の自立欲求行動を容認しにくい要因の 1 つとなっているのではないだろうか。面接調査において、調査協力者の F は、子どもの自立欲求を容認し、ゆっくりと見守る姿勢をもつために、子どもが自立欲求行動を表出させた際に 1 時間程度の時間を子どもだけのためにとるようにしていると回答している。このように対応されている対象児 F は、面接での保護者が感じる自立欲求の表出程度においても「きょうだい 3 人とも多いが、その中でも特に多いように感じる」と回答しており、自立欲求行動はきょうだい全員が多く、その中で F 児が一番多いと考えられる。更に面接の中で F は､「1 時間子どものためだけにとることで、したがった時に＜あとから＞という事が実現すると理解しているため、したい

とその場でだだをこねることがない」と述べられている。森下（2000）は、親子関係と自己制御機能の発達の関連について、母親の受容得点の高さと年中男児の自己主張が高いことを示し、母親の受容的態度が子どもの自己主張を育てる可能性を示唆している。加えて、子どもへの対応が説明的・誘導的な言葉かけ、特に子どもの気持ちや自我に訴えて自ら選択し行動するような言葉かけといった母親の誘導的養育態度（森下・前田，2015）が子どもの自己抑制、自己主張の両方が高い自己制御機能の発達した子どもを育成する可能性を示している（森下, 2000)。森下（2000）が示している内容と、今回の面接内容の結果から、保護者が自立欲求行動を受容し、子ども自らの選択を促すような養育態度が子どもの自立欲求の発達を促し、自己制御機能の発達などにも関連する可能性が伺えた。

本研究では、今回 BSQ と自立欲求程度に関しての仮説はすべてが検証されたといえない結果が示唆された。しかし、反応性の高さや固執性の結果からは、子どもの気質と自立欲求の関連が完全に否定されたとは考えにくく、この実態調査の結果を基に今後の課題として、子どもの気質特徴と自立欲求行動の関係について更に吟味する必要があると考える。

5，引用文献

安藤忠高.(2003). 自律性欲求とクリティカルシンキング志向性との関連. こころとことば 2, 51-59.

ベネッセ教育総合研究所.（2015）. 第 5 回幼児の生活アンケート速報版. 株式会社ベネッセホールディングス　ベネッセ教育総合研究所.

ベネッセ教育総合研究所.（2016）. 幼児の生活アンケート第 1 章幼児の生活. http://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=4949（2017 年 1 月 6 日）

Desmond Morris.（2008）. Baby:A Portrait of Amazing First Two Years of Life. Hamlyn.（デズモンド・モリス. 日高敏隆・今福道夫（監訳）（2009）. 赤ちゃんの心と体の図鑑. 株式会社　柊風舎）

Erikson, E. H. (1959). Identity and the life cycle. International Universities Press.(小此木啓吾・小川捷之・岩男寿美子（訳）,（1973）. 自我同一性―アイデンティティとライフ・サイクル. 誠心書房)

家原ありな.（2015）. 幼児期の自立欲求についての検討（卒業論文）. 関西福祉科学大学, 大阪.

家原ありな・鎌田次郎.(2015). 幼児期の自立欲求についての検討　その 1　自立欲求行動とその関連行動の相互関係と養育態度との関係. 日本赤ちゃん学会第 15 回学術集会抄録集, 92.

家原ありな・鎌田次郎.（2016）. 幼児期の自立欲求についての検討その 2 ―身辺自立欲求（介助拒否）の行動内容と年齢的変化―. 日本発達心理学会第 27 回大会論文集, 58.

柏木惠子.（1983）. 子どもの「自己」の発達. 東京大学出版会

水野里恵.（1998). 乳児期の子どもの気質・母親の分離不安と後の育児ストレスとの関連:第 1 子を対象にした乳幼児期の縦断研究. 発達心理学研究, 第 9 巻, 第 1 号, 56-65.

森下正康.（2000）. 幼児期の自己制御機能の発達（2）―親子関係と幼稚園での子どもの特徴―. 和歌山大学教育学部実践研究指導センター紀要 10, 117-128.

森下正康・前田百合香.（2015）. 児童期の母親の養育態度としつけ方略が自己制御機能の発達に与える影響. 京都女子大学発達教育学部紀要（11）, 99-108.

桜井茂男.(2006). はじめて学ぶ乳幼児の心理－こころの育ちと発達の支援. 株式会社 有斐閣

櫻井茂男.(2015). たのしく学べる乳幼児の心理―改訂版. 福村出版株式会社

Sean C. McDevitt, and William B. Carey. (1975). Behavioral Style Questionnaire for 3-7 Year-old Children. USA:Journal of Child Psychology and Psychiatry.（佐藤俊明・吉田倭文男（訳），（1982）．子どもの行動の調査―3～7 歳児用（BSQ）．東北大学

Sean C. McDevitt, and William B. Carey. (1978). The measurement of temperament in 3-7 year old children. USA:Journal of Child Psychology and Psychiatry.

篠原しのぶ・原崎聖子（2004）．甘えの背景に関する調査研究．福岡女学院大学大学紀要, 1, 9-20.

高橋惠子（2000）．自立への旅立ち【新版】子どもと教育．株式会社 岩波書店.

古田倭文男（2004）．幼児期の気質に関する尺度の妥当性について．仙台白百合女子大学紀要 8. 1-12.

謝辞

本研究を進めるにあたり、多くの方に大変お世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本研究の構想段階から修士論文完成までに数々のご指導、ご助言を賜りました指導教員である鎌田次郎先生に深く感謝申し上げます。また、日常の議論を通じて多くの知識やご助言を頂いたゼミ生の皆さま、諸先輩方に、心より感謝申し上げます。

そしてなにより本研究のご協力をいただいた保護者の皆さま、お子様に心より感謝申し上げます。

関西福祉科学大学大学院 社会福祉学研究科 心理臨床学専攻 家原ありな

付録 1

BEHAVIORAL STYLE QUETIONNAIRE PROFILE SHEET

（Sean C. McDevitt, &William B. Carey,1975，1978）

BEHAVIORAL STYLE QUETIONNAIRE PROFILE SHEET

Developed (1975) by Sean C. McDevitt, & William B. Carey

Child's Name _____ Date of Rating _____

Age at rating: _____ years, _____ month. Sex _____

Scoring Sheet NO: _____

Profile

	Activity (活動性)	Rhythm. (規則性)	App./with. (接近・退避)	Adapt. (慣れやすさ)	Intens. (反応の強さ)	Mood (気分の質)	Persist. (固執性)	Distract. (散漫さ)	Thresh. (敏感さ)
6	high (高い)	arrhyth. (不規則)	withdr. (退避)	slowly (慣れにくい)	intence (強い)	negative (機嫌が悪い)	non-pers. (固執的でない)	distrac. (散漫)	low (敏感)
+1S.D.	4.31	3.43	3.93	3.27	5.17	3.99	3.56	4.70	4.58
Mean	3.56	2.75	2.99	2.55	4.52	3.31	2.87	3.89	3.98
−1S.D.	2.81	2.07	2.05	1.83	3.87	2.63	2.18	3.08	3.38
1	low (低い)	very rhythm. (規則的)	approach (接近)	very adapt. (慣れやすい)	mild (弱い)	positive (機嫌がよい)	high persist. (固執的)	non-distrac. (散漫でない)	high (敏感でない)

Diagnostic Clusters （気質診断類型）

Easy (育て易い)		rhythm.	approach	adapt.	mild	positive
Difficult (難しい)		arrhythm.	withdrawal	slowly adapt.	intense	negative
STWU (エンジンがかかりにくい)	low		withdrawal	slowly adapt.	mild	negative

STWU= Slow To Warm Up

Easyの条件　「規則性」「接近」「慣れやすさ」「反応の強さ」「気分の質」のカテゴリーのうち標準値を超えるのが2つ以下であること。標準値を超えた場合でも1標準偏差値以上大きくないこと。
＊生活のリズムは不規則ではなく、はじめての刺激にも退避的でなく、慣れ難いことはなく、反応は強くないこと、不機嫌ではないことを示す。

Difficultの条件　「規則性」「接近」「慣れやすさ」「反応の強さ」「気分の質」のカテゴリーのうち4つ以上が標準値を超えること。
上記4つのカテゴリーの中に「反応の強さ」が必ず含まれること。
さらに、上記5つのカテゴリー得点の中に1標準偏差値以上大きい値が2つ以上含まれること。
＊反応が強いこと、に加えて、不規則、退避的、慣れにくい、不機嫌の中の３つ以上あてはまり、さらに、その程度が強いのが２つ以上あることを示す。

STWUの条件　「活動性」は標準値を超えないこと。「接近」「慣れやすさ」「反応の強さ」「気分の質」が標準値を超えること。
「接近」あるいは「慣れやすさ」が1標準偏差以上大きい場合には
「活動性」は1/2標準偏差値まで(3.93)上がってもよいし(より活動的になる)、
あるいは、「気分の質」は1/2標準偏差値まで(2.97)下がってもよい(より陽気となる)。
＊Dificultとの相違は、「活動性」が追加され、「規則性」が除かれたことと、反応が強くないこと。活動性が低く、退避的、慣れにくい、機嫌は悪い、反応は強くないことを示す。

Intermediate-highの条件　「規則性」「接近」「慣れやすさ」「反応の強さ」「気分の質」のカテゴリーのうち標準値を超えるのが4つ以上であること。そのうち、少なくとも1つは1標準偏差値を超えること。
あるいは、5つのカテゴリーのうち標準値を超えるのが2ないし3と少ない場合には
そのどれもが1標準偏差値を超えること。

Intermediate-Lowの条件　上記の分類のどれにも入らなかった場合。
＊「ごくふつう」のこども

This child's Diagostic Cluster _____ Date of scoring _____

Scored by _____